

TAMAKIYA

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

Uncanny アンキャニー・エイスワンダー
EIGHTH WONDER
No.1

Don't
meddle in
my
daughter!



この世界は

とある家族の

一家団欒の合間に

守られている

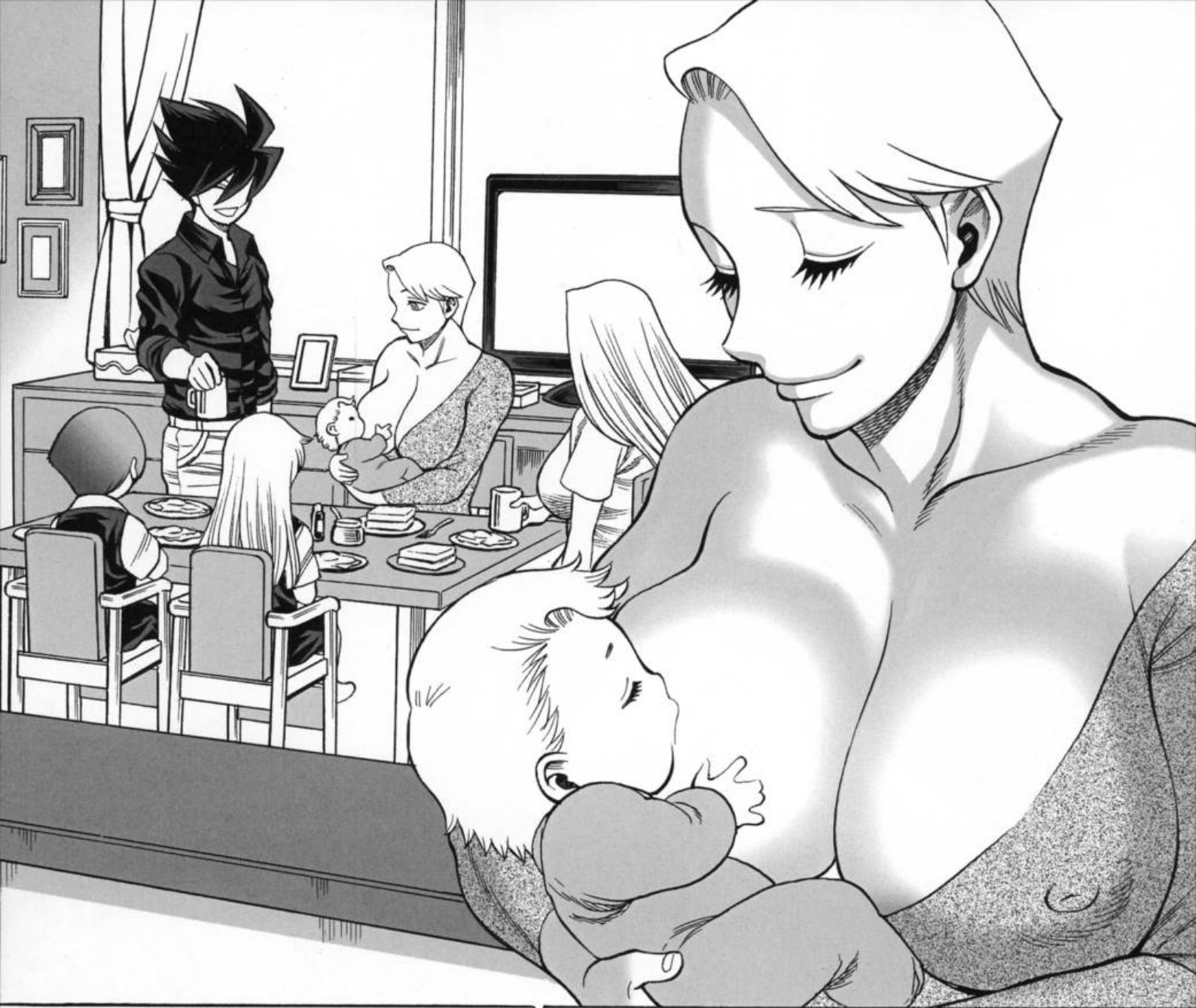
ウチのムスメに
手を出すな!
これは2代に渡って
その豪腕で世界を救う
母娘スーパードロイン
エイズワンダーの
活躍を描く

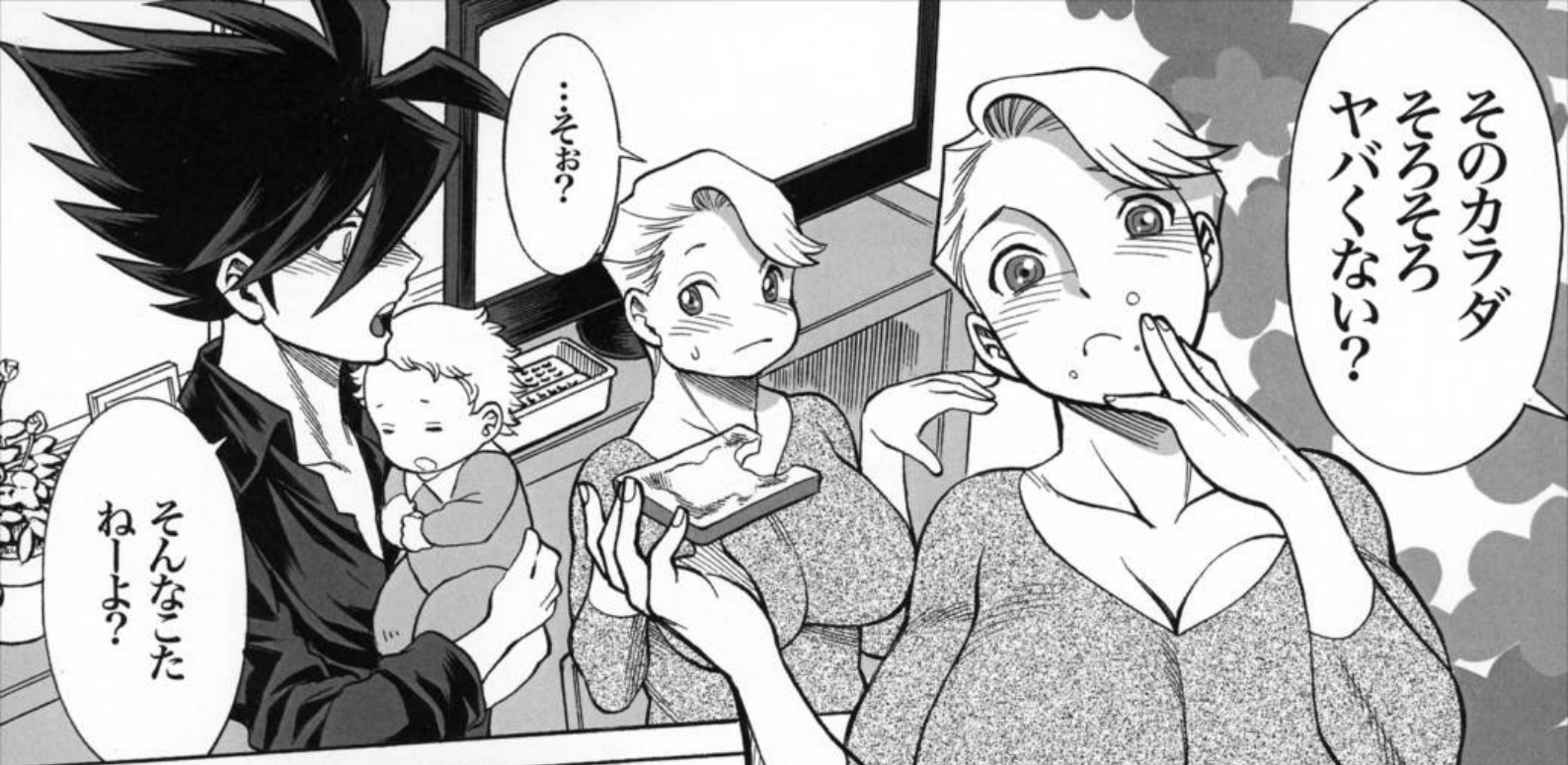
少年画報社
ヤングコミックにて
好評のうちで完結した
単行本全3巻発売中の
物語である!



Don't
meddle in
my
daughter!

- p5 ウチのムスメに手を出すな! (漫画)
環望
- p35 Wanna be a hero (小説)
Gemma
- p45 召ませ花を (小説)
ティクラクラン
- p50 だから好きなんだけどね (小説)
神野オキナ

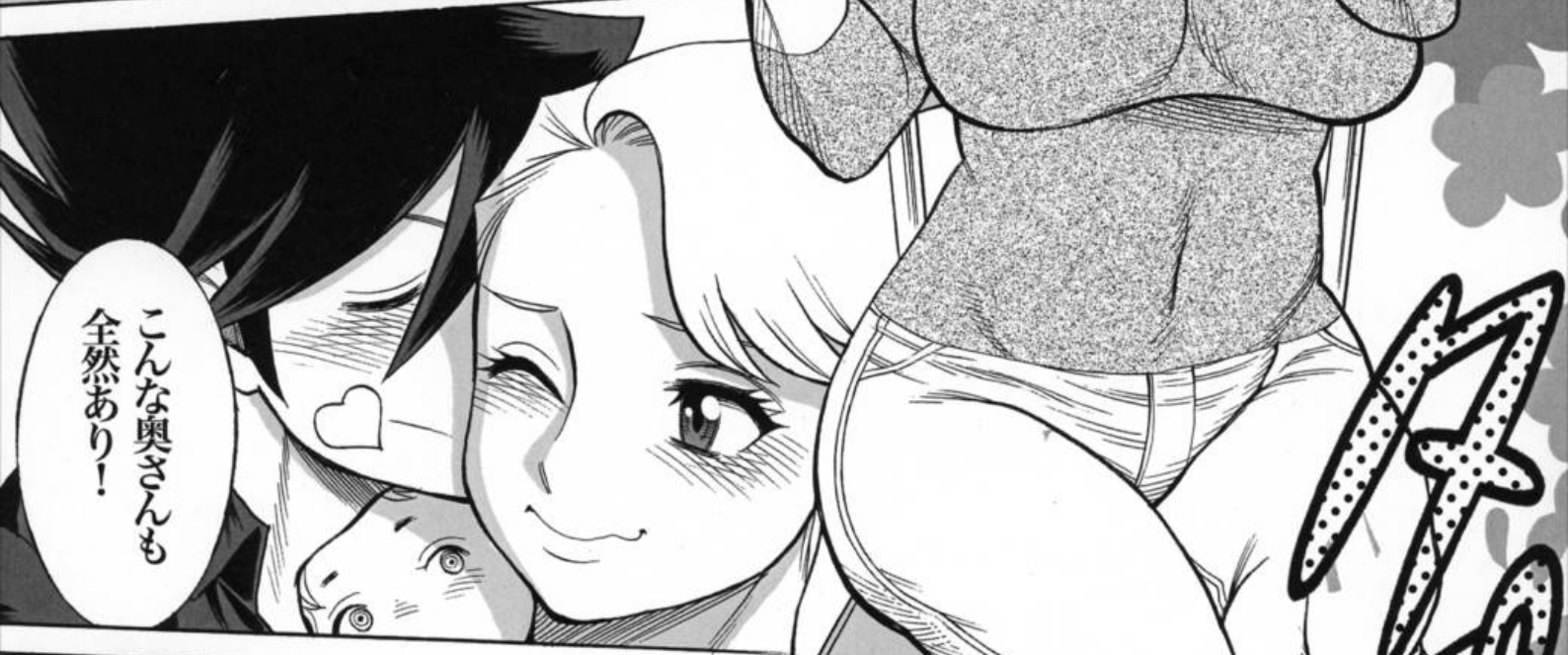




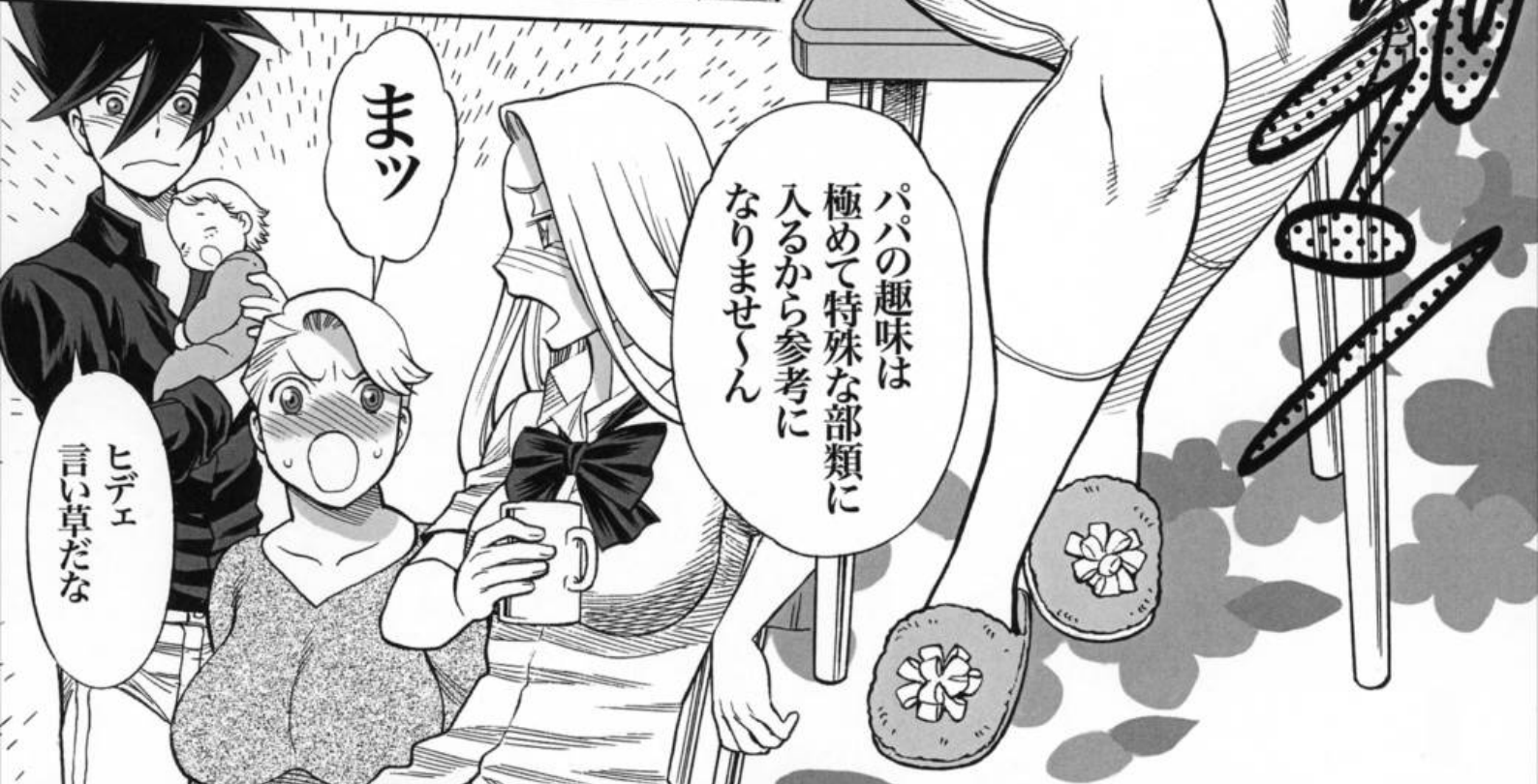
そのカラダ
そろそろ
ヤバくない？

…えっ

そんなこと
ねーよ？



こんな奥さんも
全然あり！



パパの趣味は
極めて特殊な部類に
入るから参考に
なりません

まッ

ヒデエ
言い草だな





そのカラダじゃ
コスチューム絶対
入らないもんね

いつてきまます!

ちよつとオ!



ま、これからは
ゆつくりできるん
じゃない?

初代エイズワンダーも
今度こそ本当に
引退なんだし



おい
二人とも!
学校遅れるぞ

は~~~~い



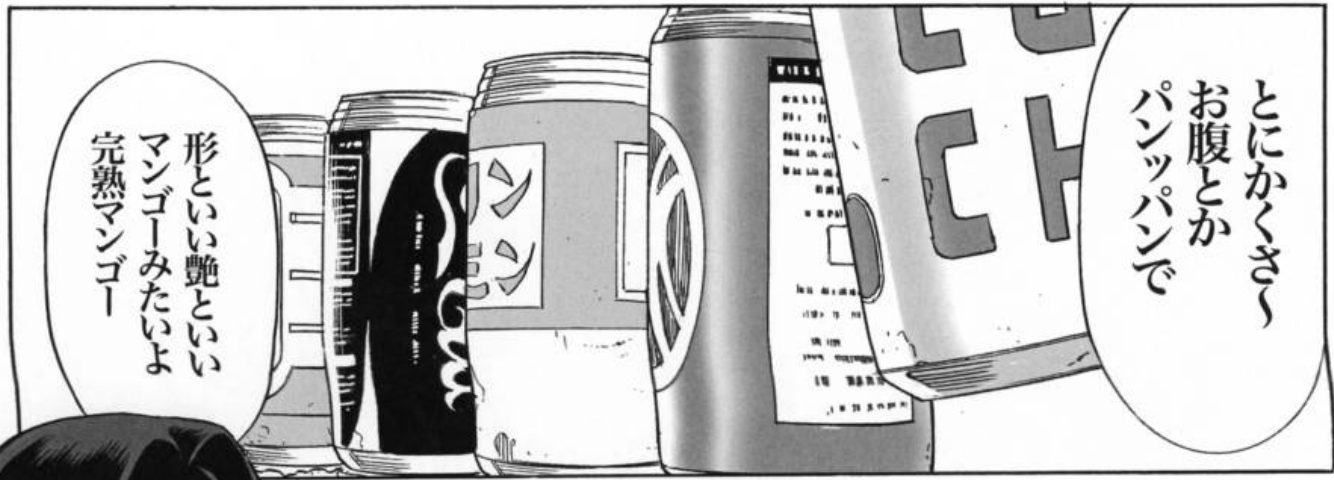
もく
最近自信ついてきた
からつて
あの子はア!

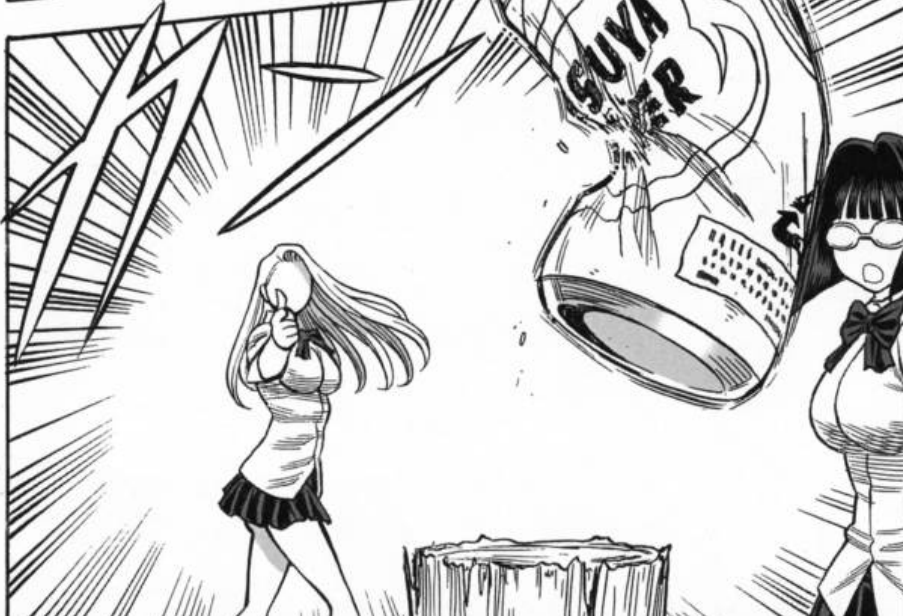
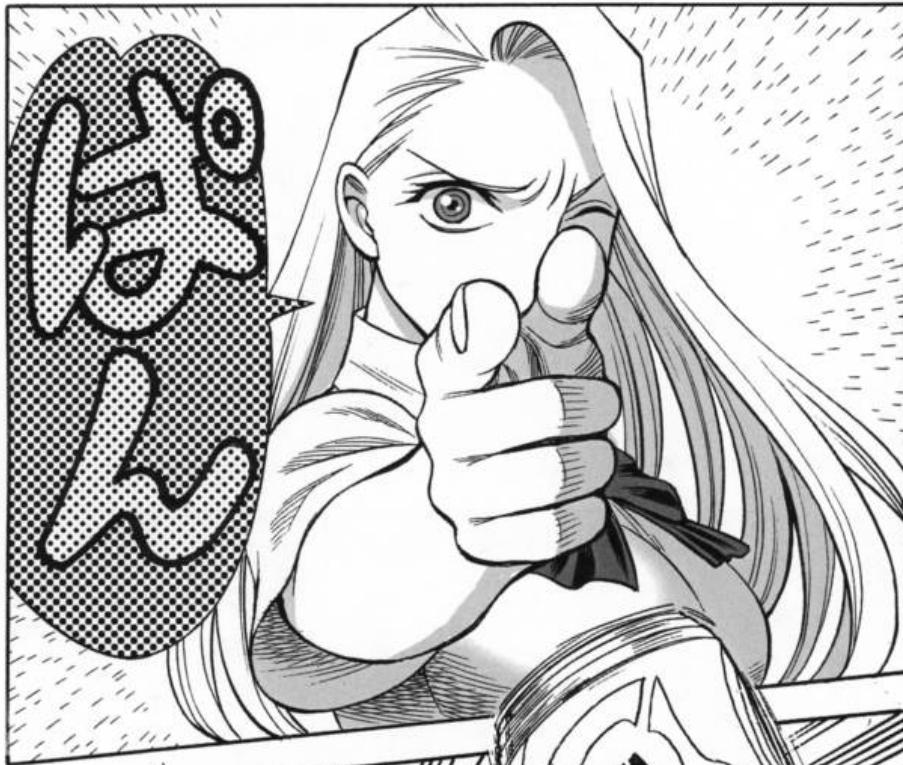


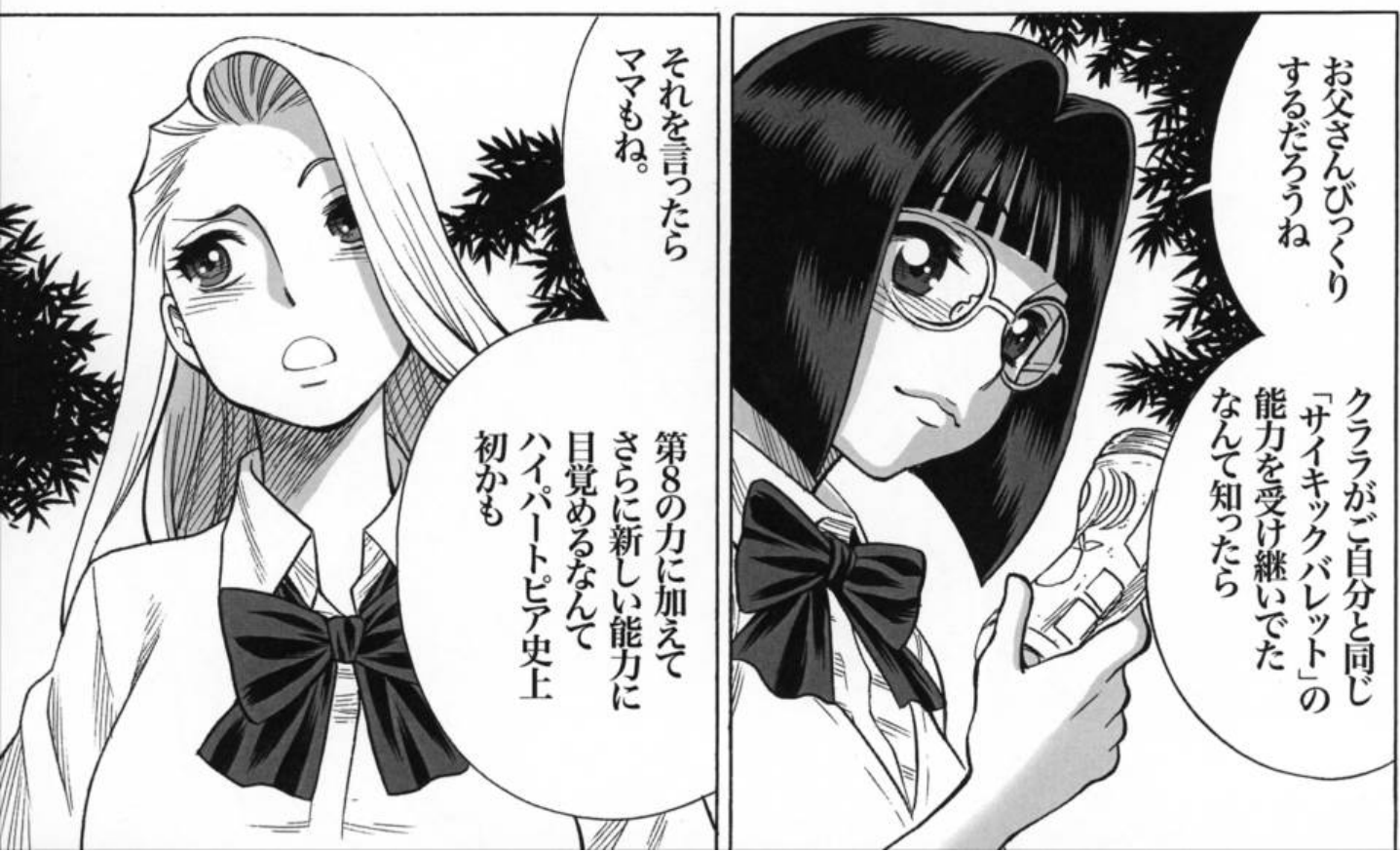
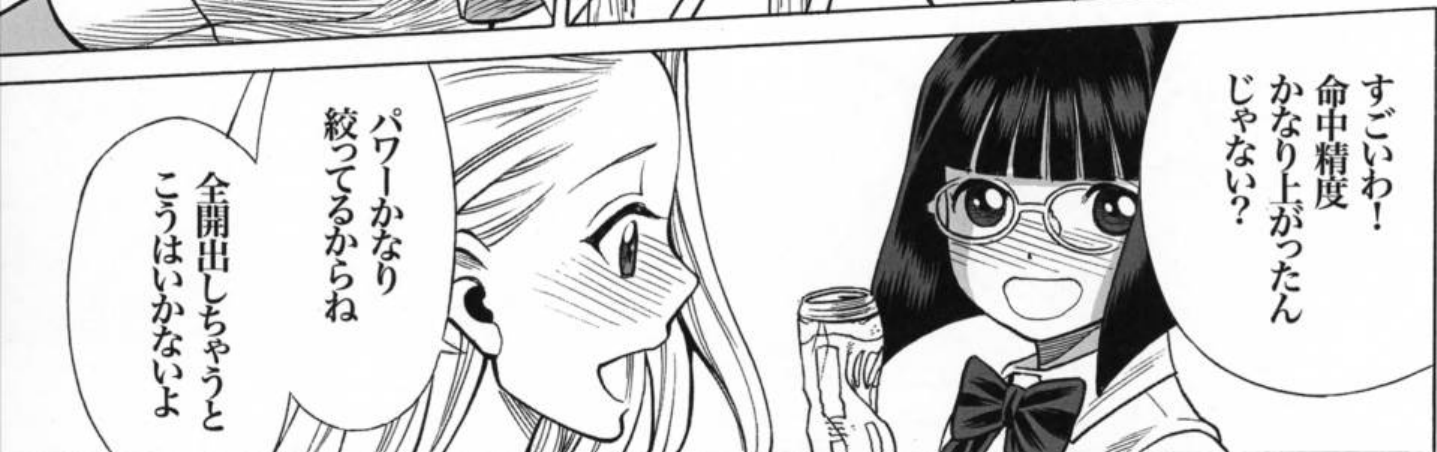
ゼッカちゃん
よそ見していると
転ぶよ?

ん~~~~い



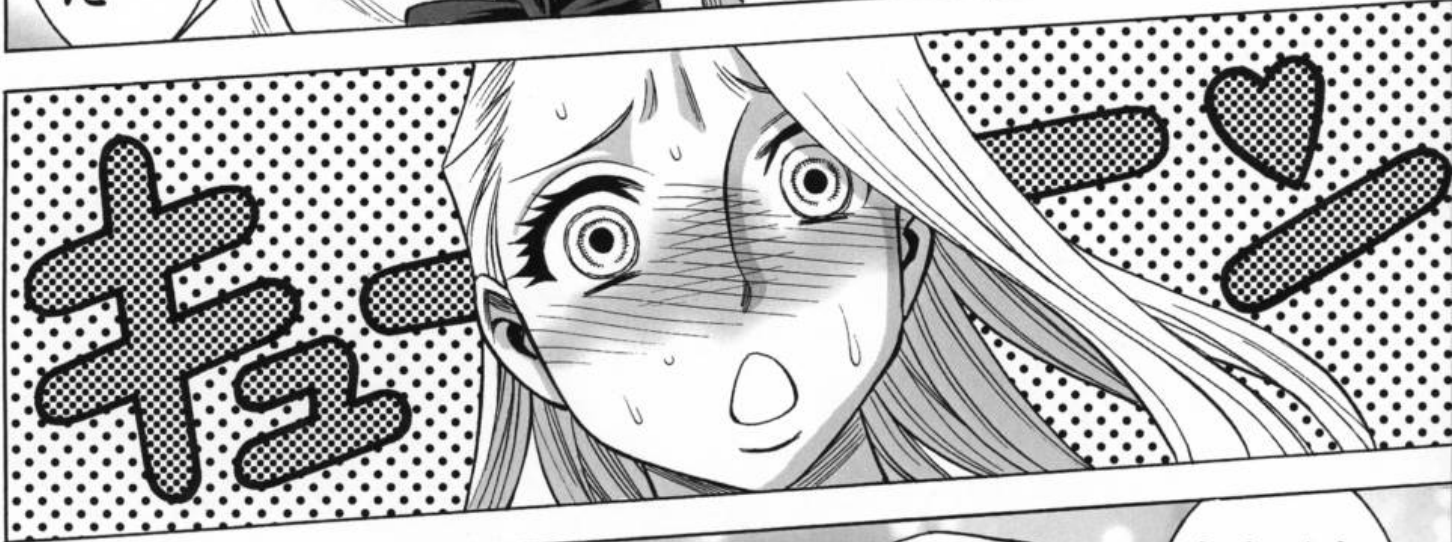








私のクララは
やっぱり
特別





朝の片付けも
済ませといたからな

ありがとう



チビ
寝たア



さて！

他にやっつけて
欲しい仕事は？



クララン時や
何もして
やれなかった
からな

取り戻してる
のさ



ゼノビアが見たら
びつくりするわね

あなたがこんな
理想的なパパに
なるなんて

じゃあ次はあ

...

そいつが一番
得意だぜ？

奥さんを
可愛がるお仕事



こんなカラダの
奥さん…

イヤ？

イヤ

やな訳
あるか〜!

あッ
はッ

オオ
ほお

おほほ

ホオオオ





奥まで

奥まで
来るっ

腰が
止まんないよ

はあ
はあ

ゴッゴッ

ゴッゴッ

ゴッゴッ

ちよウ
ちよウ
ちよい待ち

ここの
腰が...

って

あッ

あッ

聞こえてねえ!



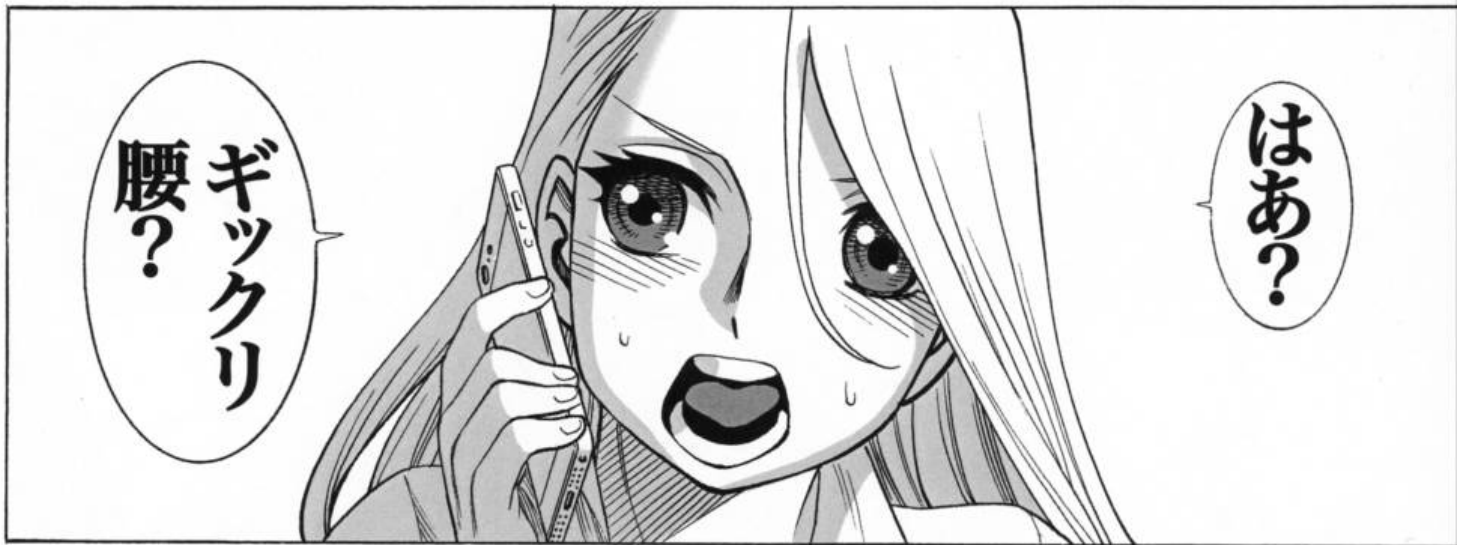


あなたっ

あなた
ゴメンなさい

大丈夫

大丈夫だから



はあ？

ギツクリ
腰？



大したことは
ないんだが
2〜3日無理
するなつて
言われてな

緊急出勤が
かかった時は
クラン一人に
頼まなきゃならん

それは別に
いいけどお



パパ
どーしたの

はは…ちよつと
重いもの
担いでて…な



…どーせまた一人して
変なことしてたん
でしょー
しょーもなー

変なこと
つて…

人のこと
言えるの？

デスよね〜

重すぎて
ダンナの腰
やっちゃうなんて

どーなのよ
コレ

コスチューム絶対
入らないもんね！

そんな事
ないモン！

ずうん
ずうん





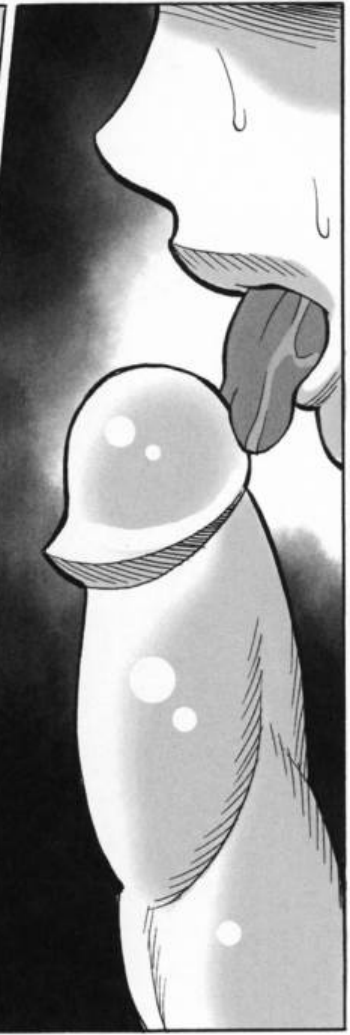
まだイケる
イケる♡

やだ
入るじゃない!



レレレ

レレレ





まこのコスは
着るとゆうより
貼るってカンジ
だしね



やっぱ
こっちは
なんかか...



しかし...
この体型だと
ますます
凶悪よねえ



こんなバカな
カッコしてる
場合じゃないわ

おっと
そろそろ
お乳の時間ね

コントロール
デイルドー
再起動確認



はい
覚えてね

再洗脳プロトコル
起動

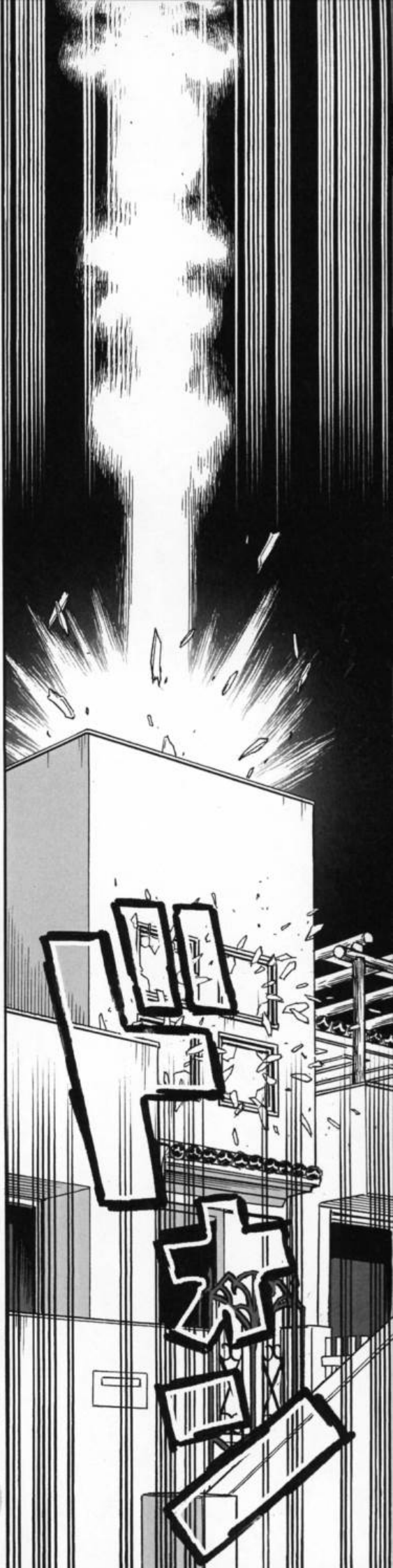


か...はあ...



ホントなんの
スイッチなんだろ

カチ









溢れる飛沫は
清らかな心!



弾む肢体は
勇気をつぶす



千の腕もて
悪をささえきる!

フューリアス・スリー
ただいま見参!

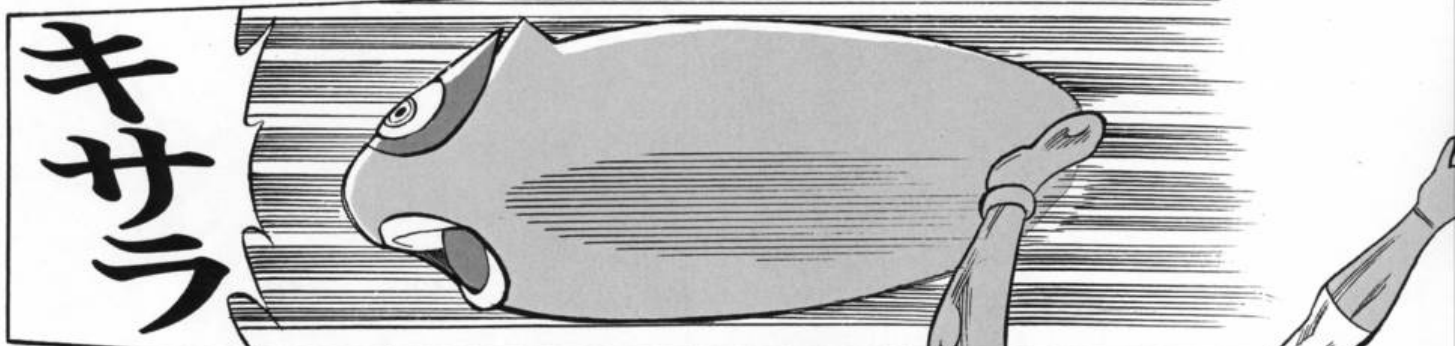
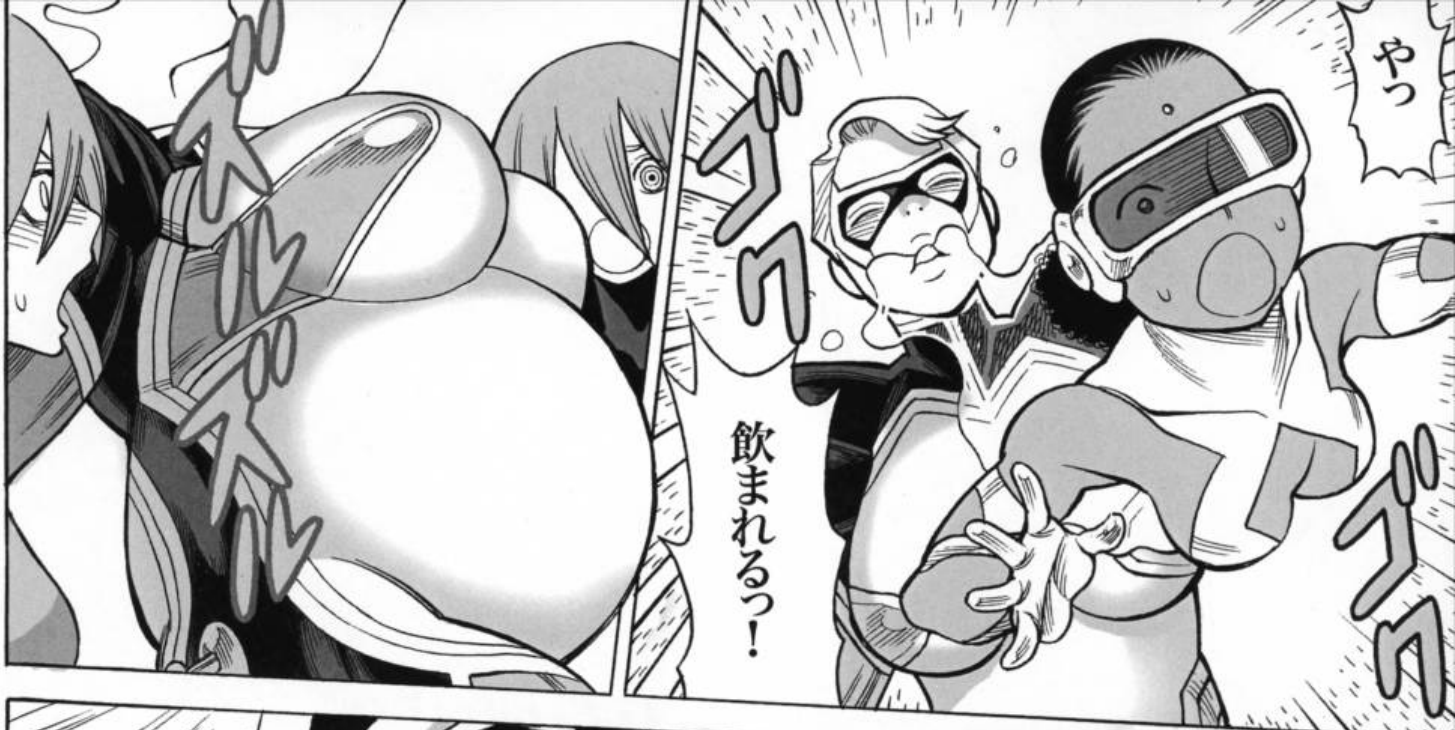




すみません
アテナさん!

このまま
失神して
もらいます!









Furious Three
Wanna be a hero

Gemma



角を曲がって大通りに飛び出すと同時に、すぐ横の街灯と向かいのビルの壁との間に「糸」を張っておく。

後を追ってきた敵が足をとられてつんのめった隙に、一瞬だけ振り向いてナイフを投げる。あとは見ない。投げた手応えで、急所に当たったとわかる。

大通りをすこし走ったら、すぐに大きくジャンプ。街路樹の枝と、ビルの看板に張りめぐらせた「糸」を使って、一瞬で三階ほどの高さまで跳び上がる。倒れた一人目をフォロースに、二人目の敵が出てくる。そいつが通りをさっと見渡す、その視界にあたしはいない。

壁を蹴って、再度ジャンプ。頭上をとった。気付いた二人目が、慌てて両手を上にかざす。予想していたより、少し早い。けど、もう遅いには変わりがいい。

二本目のナイフを投げる。敵が構えた両手のあいだに、光る円盤のようなものがいくつも湧き出して、あたしの方へ飛んでくる。当たったものを破壊する、エネルギー・ディスクだ。だが、めくら撃ちの弾幕では、あたしには当てられない。束に結びつけた「糸」で誘導されたナイフは、カーブした軌道を描いて敵の眉間へ吸い込まれていく。

円盤のひとつがあたしの頬をかすめたのと、ゴム製のナイフが敵の眉間にぶち当たって悲鳴を上げさせたのが、ほぼ同時だった。

「ゲームセット！ チーム・レッドの勝ち！」

School of Talent Rousing and Improvement of Performance (才能開花と能力改善のための学校)、略してSTRIP(ストリップ)。パカミたいな名前だけど、国際防衛組織NUDEの日本支部が運営する、れっきとした超人養成専門学校だ。あたし、オ条アスミは、その超人科二年に在籍している。

「やっぱ巧いよね、アスミは。これ、ここんとこのジャンプのタイミングとか、どうやって取ってるの？ 地図ぜんぶ頭の中に入れてんの？」

「そんなことないよー。うーん、勘……かな」

「出たよ、勘！ 詳しく！ 具体的に！」

「んー……」

週一回の模擬戦の後には、定例の反省会。敵味双方のチームと一緒に、録面を見ながらお互いの戦いぶりを評価したり、研究したりする。いいシステムだと思っけど、個人的には最近、ちよつと苦手だ。

「そうだなー……ラストの場面ね、諸星さんが突っ込んで糸に引つかかったのは、まあいいと思う。フロントなんだし、勢いがなきゃね。むしろ、その後に来たイコと一緒に足が止まっちゃったのがまずかったかな。あとイコは、前にも言った気がするけど上下方向に注意が薄いよね」

「うう。参考になります」

さつきまであたしと対戦していた敵チームの二人——フロントの諸星さんと、バックアップのイコが、そろつてうなだれる。

「わたくしは？ わたくし達はどつだつたデスカ？」

敵チームの三人目、リーダーのモニカが身を乗り出してくる。彼女は別の場所で、あたしのチームの二人と戦っていた。というか、モニカの作戦で、あたしだけが分断されて二対一で戦う羽目になったのだ。

「モニカの作戦、よかつたと思う。特に、道路標識をずらすトラップは効いてた」彼女の青い瞳が、ぱつと虹色に輝く。

「でも、その後あつさりやられ過ぎ。あれじゃ、あたしが粘つてれば二人が合流できちゃうよ」

でもすぐにしゅん、と黄色がかった灰色に変わる。彼女は異星人で、瞳の色で感情を表す。「わたくしももつと、前線で作戦できるようにしたいデスネ。何か、アドバイスはありませんデスカ？」

「うーん、モニカの能力はあんまり戦闘向きじゃないよね……」

「まあ実際には、粘るまでもなく私ら普通にやられたわけだがな」イコがじつとりとあたしを睨む。

「や、まあそこは経験の違いっていうか」

「またそれかー！」

「だって、本当それしか言いようがないんだもん」
「ハイハイその辺でー。オ条がいると反省会も楽でいいわ、ほんと」返事に詰まったあたしを、さつきから黙って見てるだけだつた教官がうまく拾つてくれた。

「今日の映像は端末に送つとくから、各自見直して研究しとくように。それじゃ、解散」

教官が出ていくと、どつと場の空気がゆるむ。諸星さんが、待っていたように身を乗り出してきた。

「ねね、あたしさ、『ムー系』のひとつて初めて話すんだけど」彼女はつい先月、超人科に転科してきたばかりで、対戦するのも今日が初めてだ。

「前世のことつて、どんな風に覚えてるもんなの？ 昔に戻りたいとか、思つたりする？」

「ちよつと！」

イコがたしなめてくれて、あたしは苦笑いをする。反省会が苦手なのは、こんな風に質問攻めにされるからだ。

今更言うまでもないことだけど、超人にはいろんな種類がいて、パワーを持っている理由もいろいろだ。

諸星さんは先祖から伝わる巫女の力が、十六歳になつて突然覚醒した。モニカは別の銀河から来た半金属の複合生命体で、一定サイズ以下の小さな金属部品と意思疎通ができる。イコは生まれつき持っていたエネルギー放射能力を、訓練でエネルギー・ディスクの形にして制御できるようになつた。

そしてあたしは、前世の記憶つてやつが、この間よみがえつたばかりだ。

前世のあたしは、あらかじめ術をこめた特別な「糸」を、自由に操ることができた。現世のあたしも、同じ力を使うことができる。細糸みたいに軽く、ロープくらいには強く、あたしの体の一部みたいに、思った通りに動く糸。使いこなせばそうとう便利だ。そう、使いこなせば。

ついでこの間、普通科から超人科に移ってきたばかりのあたしが、こんな先輩顔して反省会を仕切っているのにはワケがある。あたしはクラスの他のみんなと違って、自分のパワーを完全に使いこなせている。そのおかげで、模擬戦でも負け知らず。

当たり前のことだ。だってあたしは、前世で何年もこの力を使って戦ったり、生活したりしていた、その記憶をそっくり持っているのだから。あたしみたいに、前世の記憶でパワーを手に入れたタイプ——「転生系」とか「ムー系」とか呼ばれてる——は、そこが大きな強みなんだと、授業で習った。

超人科の一年次の実技全部と、二年次の実技の半分近くが、自分の能力を適切に使いこなせるようになるための訓練に当てられていることを考えれば、これがどれだけ大きなアドバンテージかわかる。実際、クラスの子全員、あたしから見たらでっかい若葉マークを頭に貼り付けてるようなものだ。

「そういうば、あれどうなった？先輩からの嫌がらせとかいうやつ」

「模擬戦でも一回コテンパンにしたら、止んだ」

「かーっこいー！」

「ねえねえ、どうやったら才条さんみたくなれるかな」

「だから経験だよ、経験。それだけ。毎日模擬戦やっつてりゃ、みんなそのうちこれくらいになるよ」

半分本音で、半分はお世辞だ。あたしとこの子達で、違うのは経験だけ。それは本音。素質も、やる気も、パワーだって、大した優劣があるわけじゃない。あたしより強力なパワーを持っている子だって、クラスにはいる。

でも、その経験の差は決して小さくない。十回や百回、模擬戦をこなした程度では、決してあたしには追いつけない。

あの、命を賭けて戦っていた日々には。

「……ヒーローなんて、やっつてる場合じゃないのに」

つい口を突いてしまった言葉を、聞きとがめられる前にあたしは席を立った。

「……以上のようなわけで、九八年からヒーローのコードネームやコスチュームには一定のガイドラインが設けられるようになった。法律じゃないから守らなくても別に罰はないが、ニュースとかで名前が出されないことがあったりして、宣伝上不利になる。もつとも、それを逆用するようなウイザランテもいて……」

この学校、STRIPには、大きく分けて二つの目的がある。一つは、あたしみたいな若い超人を鍛えて、能力を伸ばすと同時に、力の使い方、ヒーローとして世の中とうまく付き合っていく方法を教えること。

「きりーつ。礼」

だから、しょっちゅうバトルばかりやっつてるわけじゃない。学校の時間がずつと多い。

というか実を言えば、この学校全体で、スーパーパワーを持った本物の超人なんてほんの一握りしかない。生徒のほとんどは、単にヒーローに憧れて、ヒーローと一緒に戦いたくて入学してきた普通科生だ。

「アスミ！来週のカウンセリングなんだけど」

先生が出て行くやいなや、バタバタと駆け寄ってきたのは春原リサ。あたしの元ルームメイトだ。

「退行催眠と高電圧負荷って、どっちがいいと思う？」

「知らないよ……というか、催眠は前にもやってな

かった？」

「一度で上手くいかないこともあるって言われたもん。ね、どっちがいいかな」

「わかるわけないじゃん、そんなの」

STRIPのもう一つの目的。それは、人に眠っているスーパーパワーを覚醒させ、超人を生み出すことだ。

繰り返しになるけど、ヒーローがパワーに目覚める理由はいろいろだ。曰く、落雷に打たれた。偶然できた薬品を飲んだ。放射線を浴びたへびに噛まれた。異次元から来た悪魔と契約した。

それらを真似て、STRIPでは「カウンセリング」と称して色々な実験を（人体実験とは言われないう程度で控えめさで）生徒にほどこしている。なんでもカウンセリングかというのと、「能力に目覚めない生徒の悩みを解決する」という名目だから。正直、法律的にも人道的にも相当ギリギリな気がするけど、参加は自由、しかも毎回申し込みが多すぎて抽選になるくらい人気なので、特に問題にはなっていない。何を隠そう、このあたしが前世の記憶を取り戻したのも、カウンセリングで退行催眠を受けたおかげなのだ。

「ほら、漫画とかだとさ、前世の記憶が戻ったらだいたい身近に仲間もいるじゃん。私、ルームメイトだよ、アスミの仲間かもよ？」

「悪いけど、リサに似た仲間は記憶にないな……」

ただし、当たり前だけど成功率はすごく低い。誰にでもパワーが眠っているわけじゃないのだ。超人科にいる生徒のうち、カウンセリングで能力に目覚めたのはあたしを含めて三人だけ。「ムー系」にしぼるなら、学校史上あたしが初めてだそう。

あたし以上にヒーローになったがっていたリサはものすごく悔しがり、あたしが超人科に移ったあとも、週に何回かの普通科との合同授業のたび、こうして何かとあたしに絡んでくる。

悪い子ではない。決して悪い子ではないんだけど。

「真面目に聞いてよ。先輩として何か言うことないの？ そうだ、一緒に受けない？ 退行催眠」

「私が受けてどうすんの。もう思い出すことなんてないよ」

ああ、ダメだ。なんでこんなにイライラするんだろう。ちょっと前までのあたしと、リサは何もかわらないのに。ただ、ヒーローに憧れているだけの子なのにな。

「ねえ、私真剣に頼んでるんだよ」

「とにかく、何がいいかなんてわかるわけないから！ 手当たり次第にやってみたら？」

これで会話は終わり、というサインに、椅子を鳴らして立ち上がると、あたしは廊下へ出た。リサの棘をふくんだ視線が背中に刺さる。最近、こんな風に教室を後にすることが多い気がする。

リサだけじゃない。あたしが前世の記憶に目覚めて以降、普通科時代のクラスメイトが、妙に親しげに接してくるようになった。冗談みたいだが、みんな「現世の友達」前世の仲間」枠を狙っているらしいのだ。

気持ちにはわからないでもない。普通科にいた時のあたしは、勉強も運動も、特に目立つところは何もない平凡な子だった。それが催眠術一発で超人科の模擬戦トップランカーになったら、「あわよくば自分も」と思うのは当然かもしれない。

そして、そういうアプローチをはねつけ続けているなら、自分の評判がどんなことになるか、それも、考えなくてもすぐにわかる。

早足で廊下を歩いていくと、背後に視線と、密やかなささやき声を感じる。棘と羨望の入り交じった意識が絡みついてきて、肌がひりつく。

知ったことか。あたしには、ヒーローなんかよりもっと大事なことがある。

以前のあたし、才条アスミになる前のあたしが生きていた世界。

今の感覚で言えば、そこはいわゆる「剣と魔法の世界」的なところだった。

あたしが生まれ育ったのはリスタニアっていう土地で、あたしはクルーディって名前だったけど、名前は大きく重要じゃない。重要なのは、あたしの故郷が侵略を受けていたってことだ。

邪神ラネージア。太古の混沌から生まれた、暗黒の魔神。奴らの勢力からリスタニアを守るために、あたしや、仲間達や、他の大勢の勇敢な人たちが、長いあいだ戦い続けてきた。多くの仲間を失い、死ぬかと思つたことも何度もあった。それでも最後には、あたし達は奴らの本拠地に乗り込み、奴らの幹部の一人をついに仕留めることができた。

でも、戦いはそれだけじゃ終わらなかった。そして、ラネージアの大神官は邪神の秘術を使って、自分の魂を別の世界へ飛ばした。

別の世界で力を蓄えた大神官が、いつ戻ってくるかもしれない。何より、その世界を邪神の魔の手から守らなくちゃいけない。あたしと仲間達は奴らと同じ秘術を使って、大神官が逃げていった先を追いかけて転生した。

……と、いう記憶がよみがえつたのが、つい数ヶ月前。ヒーローに憧れてSTRIPに入ったただの普通科生だったあたしは、超人科に転科し、部屋も変わり、いろんな検査を受け、NUDEから来た人と面談し……とにかく、大忙しになった。一件だけだけど雑誌のインタビューまで受けた。それはある意味で、憧れていた将来そのものだったけれど、でも、そんなこんなの間中、ずっと頭に引っかかっていることがあった。

早く仲間を見つけて、邪神の使徒を倒さなければ。

あたしは確かにヒーローに憧れて、STRIPに入った。でも、戦士クルーディでもある今のあたしにとつて、ヒーローとして活躍するなんて、まったくどうでもいい。

あたしの仕事は、邪神と戦うこと。ずっとずっと大事な使命が、あたしを待っている。

「おかえりー」

寮の部屋に戻ると、ルームメイトのイコがもう帰ってきていた。バスルームに入って、顔を洗う。ストレスが増えたせいとか、恐ろしいことに最近眉間のシワが定着しつつあるので、念入りにもみほぐす。鏡を見ると、そこにあたしの顔がある。当たり前だけど、不思議だ。北方系リスタニア人のクルーディ・メドラウトと、生粋の日本人である才条アスミの顔が同じはずなのに、あたしはどちらも同じ、自分の顔として認識している。脳の認知がどうか、いちど生物の先生に説明してもらったけど、さっぱりわからなかった。

あたしは一体、誰なんだろう。頭を振ってその考えを追い出し、あたしは部屋に戻ってベッドに腰かけると、ノートPCを叩いて、毎日見ているサイトを開いた。

「ムーの広場」。名前通り、ムー系超人のための会員制ホームページだ。ムー系の中には、あたしのように、もとの世界の仲間を探してる人がけっこう多い。そういう人が情報交換をする場所、ここをチェックするのはもうずいぶん前からあたしの日課になっている。

掲示板をひらいて、自分の立てたスレッドを見る。

（リスタニア、ラネージア、ラーラム高原の戦い、《風の四人》などの言葉に覚えのある方いましたらご連絡ください。当方《系使い》のクルーディ）

今日も返信はなし。ため息が出る。

「ただいま戻りマシター」

もう一人のルームメイト、モニカが入ってきた。

「おかえり。ね、こないだ頼んだやつ、どう？」

「申し訳アリマセンデス、やっぱり反応ないデスネ」

金属部品と意思疎通できるモニカは、街中いたる所にあるネジや金具に「話を聞く」ことができる。少しでも情報が欲しくて、ヒマな時にはあたしの伝えた人相やキーワードに一致する人間がいないか、聞き込みを力貸してもらっている。

転生前と後の顔が同じである保証はないから、雲を掴むような話ではあるけど、何もしないよりはましだ。というよりも、そんな方法にでも頼らないと、手がかりが全然ないのだ。

すまなそうに身をすくめてあたしの背後を通ったモニカが、PCの画面をのぞいて、ふと首をかしげた。

「ソーイェバ、前世系の方を『ムー系』って呼ぶのはなんでデスカ？ 『ムーの広場』だカラ？」

「え？ ううん、逆、逆。もともと『ムー世代』って言葉があるんだよ」

ずっと昔、たしか三十年くらい前に、突然「前世でムー帝国の戦士だった」という記憶が覚醒する若者が大量に発生する、という事件があったらしい。その人達を「ムー世代」と呼んだのが発端で、転生系の超人を「ムー系」と呼ぶようになったとか。

「このサイトも、そのムー世代の人がやってるんだって聞いたことあるよ。会ったことはないけど」

寝転がっていたイコものそのそと起き上がって寄ってくる。あんた達、ひとのPCの画面を覗き込むのは失礼だって教わらなかったのか。

「ムー系って、掲示板できるほどいっぱいいるんだね。海外にもいるの？」

「いるけど、大体は過去の時代からで、あたしみた

か」

「へー、なんで？」

「わかんない。日本のヒーロー界七不思議の一つらしいよ」

ニュースのページも見てみる。特にめぼしい情報はなし。あたしともリスタニアとも関係ない、ぜんぜん別の世界から転生してきた人が、恋人が見つかったから結婚式を挙げるとか書いてある。ふーん、羨ましくないし。

「アスミの仲間って、何人いるって言ってたっけ？」

「三人」

「転生って言ったって、あっちこっちの世界から来たりしてるわけでしょ？ その中で、三人しかいない仲間を見つけるのって難しくない？」

「難しいよ！ だから大変なんじゃん！」あたしは両手でパンとテーブルを叩いて、キーボードに突っ伏した。

「もー、早く合流して、今後のこと相談しなきゃいけないのに……」

もう一度だけリロード。やっぱり、スレッドに返信はつかない。あたしは諦めてPCを閉じた。気分転換に食堂でなんか飲んでこよう。

「アスミ！ 演習室借りたんだ、模擬戦やろうよ」そう思っ

「アスミ！ 演習室借りたんだ、模擬戦やろうよ」そう思っ

「アスミ！ 演習室借りたんだ、模擬戦やろうよ」そう思っ

「アスミ！ 演習室借りたんだ、模擬戦やろうよ」そう思っ

「アスミ！ 演習室借りたんだ、模擬戦やろうよ」そう思っ

分あたしの空いたベッドに入った子だろう。

「キサラだ」

「あ、どうも」

「キサラのヒーロー狂いはさておき」ずばっと切って捨てた。なるほど、こういう人か。

「普通科でも超人との実戦経験は大事なのに、あまり力を入れてくれないのが困る。都合がよければ、ぜひお願いしたい」

「あー」少し納得した。

生徒の大半は、結局パワーに目覚めないまま卒業することになる。そういう人はどうするかという点、たいていはNUDEに就職するのだ。つまりSTRIPは、NUDEのスタッフ養成校でもある。「ストリップを終えたらヌードになる」とは、新入生が必ず聞かされるジョークだ。

NUDEの仕事もいろいろだろうけど、戦闘要員になればヒーローと共闘する機会も、スーパーヴィランと戦う機会もある。確かに経験を積んでおきたいところではあるのだろうか。

「それ、私にメリットなくない？」

「何を言ってるんだ」キサラが意外そうに眉を上げた。「ヒーローやるなら、一般人への対処だって必須の技術だろう。授業にもあるそうじゃないか」

「うっ」

問題は、あたしはヒーローなんかやる気はなくて、そんな技術も学ぶ気はないということなのだが……

まあ、そんなのは公言するようなことじゃない。変なことを言っただけで噂にでもなったら、「精神的にヒーロー適性低し」なんて認定されて、本物のカウンスリングを受けさせられかねない。あたしはちよつと肩をすくめて、キサラ達の後について演習室へ向かった。

ちなみに、模擬戦では三対一で完封した。

「ラーラム高原とは、カーラム高原のことですか？ あなたは、黒髪の綺麗なクルーディさんですか？」

その書き込みを見たのは、それから三日ほどたった朝だった。あたしはノートPCの画面を二度見して、それから朝ご飯を食べて、深呼吸をして落ち着いて、もう一度画面を見た。間違いない。

カーラム高原というのは聞いたことがないけど、リスタニアにはいろんな民族や種族がいた。そうした人達の違った言語での呼び名かもしれない。そして何より、あたしは前世で黒髪だった。

「はい、私はクルーディです。クルーディ・メドラウという名前でした。黒髪です。前世で会ったことのある方ですか？ お話したいです」

キーボードを叩く手が震える。落ち着け、落ち着け。まだイタズラや勘違いって可能性も残ってる。あんまりグイグイ行ったら引かれちゃうかもしれない。でも消極的だと思われてもダメだ。返信の短い文面を考えるのに、昼までかかった。好きな男子に初めてメールする時みたいな気分だ。その日一日は授業も何も頭に入らなくて、模擬戦まで落とした。「何かいいことあったの？」なんて、みんなに訊かれる始末だ。

翌日、また返信があった。

「私はリディアという名前だと思います。リスタニアという場所で暮らしていた記憶があるのですが、おぼろげでよく思い出せません。ただ、クルーディさんに助けてもらったことだけは覚えています」

「リディアさん……」

あたしの仲間に、リディアという名前の子はいない。そういう名前の子を助けた覚えもない。前世で

のあたし達はそれなりに活躍して、結構大勢の人を助けたから、覚えてないだけって可能性ももちろんあるけど。

でも、あたしの知ってる限り、あつちの世界から転生してきたのは邪神の大神官と、あたし達だけだ。つまり、これは十中八九イタズラか、さもなければ敵の罠だ。一日たって冷静になったおかげで、それくらいの判断はできるようになっていた。

「すみません、リディアという名前は覚えていません。でも、リスタニア出身の人と会えて、すごく嬉しいです」

だからあたしは慎重に、リディアさんとのやりとりを重ねていった。リスタニアのことや、記憶が目覚めたきっかけ、今の暮らしなど。疑っているような態度にならないように気をつけつつ、探り探り相手のことを聞いていく。

リディアさんはあたしと違って、前世の記憶がはっきりしてないらしい。少しずつ思い出してもらいうちにわかってきたのは、どうやら彼女はあたし達がラネージアの大神官を仕留めた、その儀式の場にいた生贄の子供達のなかの一人だったらしいってこと。大神官の転生の儀式に、たまたま巻き込まれたんだとすれば、記憶が不確かなのも納得がいく。ただし、それが全部嘘だという可能性も、もちろんある。

数日かけてたどり着いた答えは、

「わからない……」

だった。

邪神の手先だとも、巻き込まれた一般人だとも、どちらとも決める証拠がない。ちよつとおかしな点もあるにはあるけど、よく前後の話を聞いていると、単なる気にしすぎと思えてくる。自分自身のことを振り返ってみても、記憶なんて完全に辻褃が合っている方が珍しいのだ。

でも、全部がよく練り込まれた嘘だという可能性も完全には捨てきれない。

これ以上考えても答えが出ないと判断したあたしは、

「リディアさん、一度、直接会ってお話ができませんか？」

面会を申し入れてみることにした。

彼女が本物のリスタニア人でも、邪神の手先でも、この機会は逃さないはずだ。案の定、すぐにOKの返事が来た。

来週の土曜日に、Y浜駅で。

あたしは当日の準備を入念に始めた。今のところ、残念だけど、リディアが邪神の使徒で、あたしを罠にはめようとしている可能性の方が高いと考えるべきだろう。むかし習い覚えた、邪神の力を封じる護符の作り方を思い出して、作れるだけたくさん作っておく。服や靴やカバンにも、守護の呪文と図形を目立たないよう描き込む。

ヒーローの中には魔力を使う人達もいるので、学校の図書室には魔術に関する本も揃っている。ラネージアは異世界の邪神だから、この世界の魔法が通じるとは限らないけど、異世界の神を追い払う呪文とかはないかな、と分厚い本のページをめくっていると、

「アスミ、聞いたよ！ 前世の仲間とどうとう会いに行くんだって？」

「それ、私もついてっていいかな」

「ついてきて何すんの」たぶんモニカが喋ったんだろう。あの子は嘘がつかない。

「いや……手伝い？ てか、付き添い？ ほら、サイドキック的な」

「あんた、まだそんなこと言ってるの」

あたしは深くため息をついた。「遊びに行くんじゃないんだよ」

「もちろん、行くからには真面目に手伝うよ」

「そういう意味じゃなくて」あたしは声をひそめて手招きをした。あまり言いふらしたくはないが、もう彼女にはちゃんと話した方が諦めてくれるだろう。「仲間とは限らないんだよ。詳しく言えないけど、もしかしたら敵かもしれないの」

「だったらなおさらじゃない！ 何かあったときに助けがいるでしょ」

「……！」

「前にも言ったじゃない、能力を開花させるには実戦が一番なんだよ。チャンスがくれると思ってるさ」

もう、我慢の限界だ。

あたしは本を閉じて立ち上がり、リサに向き直った。

「いい加減にしてくれないかな」

「えっ」

「私はパワーを持ってるし、経験も積んでる。準備もしていく。その私にどうにもできないことがあつたら、あんたがなんとかできるの？」

「いや……」

「大体、チャンスって何？ 私はあんたの引率に行くんじゃないんだよ」

「私はただ……」

「リサはただ、かっこよく活躍してまわりから持ち上げられるチャンスが欲しいだけでしょ？ 悪いけど、私はそういうの興味ないの。必死なの！ もう首を突っ込んでこないで！」

ありったけの言葉を叩きつけて、あたしは図書室を出た。

泣き出しそうなリサの顔が、いつまでも目の奥に焼き付いて離れなかった。泣きたいのは、こつちだ。

Y浜駅の改札口に現れたその人は、私の予想に反して、アラフォーかもっと上くらいのおばさんだった。

「リディアさん、ですか？」

「貴女がクルーディさん？」

上品に微笑んだ女の人は、少しためらってから、「浜口です」と名乗った。

「やつぱり、人前では少し恥ずかしくてね。あなたも、お名前を伺っていい？」

「あ……才条です。才条アスミ」

言葉の端々や、待ち合わせの日取りがずいぶん先だったあたりから、たぶん社会人だろうとは思っていたが、こんなに年上だったとは。

「こんなおばさんで驚いた？」

見透かされたようなことを言われて、どきっとした。「いえ、そんなことは」

浜口さんはあたしをじっと見ている。深く観察しているような、すべてを受け入れる準備をしているような、不思議な目だ。あたしもどうしたらいいかわからなくてまっすぐ見返していると、急にくしゃつと笑って、はにかんだような顔で目をそらした。

あ、この人、意外と可愛いかもしれない。

「あ……つと。どうしようかしら。時間、あるのよね。お腹空いてない？ 散歩でもしてみよう？」

「えっ、ええと。お腹は別に、その、どうしましょつか」

お互い軽くしどろもどろになった後、とりあえず喫茶店に入って、落ち着くことにした。

リディア——浜口アヤコさんは、Y浜の近くでエステを経営しているのだという。骨盤矯正に定評があるそうで、そういうえばあたしも電車の車内広告で名前を見たような気がする。

「よかったら、来てね」

なんて、クーポン券をもらったりしたけど、そんな話をしに来たんじゃない。あたしはぐっと身を乗り出して、

「リスタニアの話、いいですか」

「ええ、もちろん」

浜口さんも、きゅつと唇をむすんでうなずいた。

「まず、私知ってる町なんですけど……」

慎重に切り出した会話は、だけど心配するほどのこともなく、あつという間に速度を増して流れ始めた。

掲示板には書き切れない、細かなこと、些細なこと。生まれて初めて、同郷の人に出会ったようなものだ。話したいことも、聞きたいことも、いくらでもある。

「……そうそう！ あの僧院の角の所で配ってる、蜂蜜水がおいしくて」

「でもあれって、今から思うとただ蜂蜜を水で薄めただけのものよね。今飲んでもおいしいのかしら」

「軟体人種っていたじゃないですか、あのナメクジみたいな連中。私喋ったこともないんですけど、リディアさんあります？」

「ないわよ、私山育ちだったもの。お爺さんの頃は戦争があつたとか聞いたけど」

「戦争っていえば、『ダガンの二十二兄弟』の神話で……」

昼過ぎに喫茶店に入ったのに、気付けばすっかり夕方になっていった。

「ずいぶん、記憶がしゃっきりしてきた気がする」

浜口さん……リディアは両手を組んでぐつと伸びをしてから、ため息をついた。

「でも、ごめんなさい。結局私は、あなたの仲間でも何でもなかったみたい」

「いえ、そんな。同じ出身の人が見つかったっていうだけで、もうすごく嬉しいですよ」

夕食を一緒にどうかと誘ってくれた浜口さんに、寮の門限があるからと謝り、二人並んで駅まで歩く。

駅に近づくにつれ、二人とも微妙に早足になり、改札を抜けるとまっすぐトイレに向かった。話が楽しすぎて、喫茶店で行くのを忘れていたのだ。隣を歩く浜口さんが、私もよ、と言うように首をかしげて笑った。

トイレの入り口をくぐると同時に、浜口さんが襲いかかってきた。

あたしはその手をかわし、用意していた護符を叩きつける。

読んでいたわけじゃない。怪しんでいたわけでもない。ただ、今日一日ずっと警戒を解かなかっただけだ。

間髪を入れず、左手でもう一枚護符を抜く。さらにバッグの中から、あらかじめ「糸」に通しておいた残りの護符を繰り出して、彼女の全身に巻き付けていく。

勝った、と確信したあたしのお腹を、何か熱いものが貫いた。

トイレの鏡に叩きつけられて、床に転がる。視界の端に、片方の目を赤く光らせて、全身に絡んだ護符を無造作に振り払う浜口さんが見えた。

まさか、護符が効かないほどの高位神官だったのか？ いや、それなら気配や魔力でわかるはずだ。状況が掴めず混乱するあたしの顔に、パンプスの爪先がめり込む。呼吸ができないでいるうちに、もう一発。

「何でこんな、小娘に！ 私には、何もなかったのに！」

何かわめいている声が聞こえる。ちがう、これはラネージアの方じゃない。この女は邪神の神官じゃない。かろうじて残った意識の一部分がそう叫んでいたが、それがどういう意味を持つのか、判断する力は残っていないかった。

残った「糸」を飛ばして彼女を拘束しようとするが、軽々と引きちぎられた。そのショックで全身に激痛が走り、あたしは意識を失った。

「……アスミ！ アスミ！」

次に意識を取り戻した時には、四つの顔があたしを覗き込んでいた。

リサ、イコ、モニカ。あと、知らない男の人がひとり。

「何……？ どうしたの、みんな……？」

もうろうとした頭が、徐々にはっきりしてくる。ここはどこで、今はいつか。あたしはなんで横になっ

っているのか。すべてを思い出すと同時に、あたしは跳ね起きた。

「あいつは？ 浜口……」

喋ろうとする口の中にとんでもない痛みが走り、思わず顔をしかめた。そうだ、浜口アヤコに口を蹴られたんだ。

「落ち着いて、アスミ。もう大丈夫だから。あいつは逮捕されたよ」

イコがなだめてくれて、あたしはやっと少し落ち着

いた。

「なんで、みんないるの？」

「リサが連絡くれたんだよ。アスミが浮き足立ってて危ないからって、今日ずっと三人であんた達を探してたんだ。ギリギリ間に合ってたよ」

「え……」

リサが？

一歩後ろに下がっていったリサが、ちよつと恥ずかしそうにうなずいた。あたしも、なんとなく頭を下げる。

その後どうしたらいいかわからなくなって、あたしは話題を移した。

「あの……それで、この人は」

『ムーの広場』の主催者さんデスネ。今度はモニカが答える。

「ええ？」

「アスミがどこ行ったか知りたいデスノデ、私が連絡取りマシタ」

普通のサラリーマンにしか見えないその人は、一歩前へ出てくると深々と頭を下げた。

「折笠と申します。このたびは我々の身内がご迷惑をおかけして、本当に申し訳なかった」

「いえ……身内？」

折笠さんは口ごもり、気まずそうに咳払いをしてから、おもむろに言った。

「君を襲った彼女も『ムー世代』なんだよ」

「えっ！」

あたしは目を丸くした。

「君のような人を逆恨みして、襲うということを何度か繰り返している。我々も警戒しているんだが、今回はまんまと出し抜かれてしまった」

あたしは呆然と、折笠さんの顔を見上げた。言われてみれば谷口アヤコもこの人も、同じくらいの年配に見える。なるほど、ブームになった時代を考えてみれば、「ムー世代」の人達はこのくらいの歳だろう。

そして、彼女のパワーの由来もわかった。なるほど、真正正銘の「ムー系」だったわけだ。

「彼女は話術がとてつ巧みなんだ。君も、話しているうちに、彼女が自分と同郷の出身だと、つい信じ込まされてしまったと思うんだが」

「ああ……」

彼女が邪神の使徒だという疑いは最後まで捨てなかったが、リスタニアの出身だということは疑いさえしなかった。あれが全部、ただの口車だったなん

「調べたら、NUDEのデータベースにも登録されている立派なヴィランでしたデスネ。コードネームは『エンヴィアス』デスヨ」

「エンヴィアス……」

嫉妬深い、という意味だ。「私のような人を逆恨み……って、どういう意味ですか？」

折笠さんはまた口ごもった。今度は少し長い。あたし達四人がじーっと見ると、あきらめたようにおに深いため息をついてから口を開いた。

「これは、あまり知られたくないことなんだが……君は我々のせいでこんな目に遭ったのだから、知る権利があるだろうね。『ムー世代』について、どんなことを知っているかな？」

「えーっと……八〇年代？くらいに、前世でムーの戦士だったっていう記憶が覚醒した人達のことですよ」

「そう、僕たち自身もそう思っていた。前世のことをおぼろげにしか思い出せない間はね。だけど、記憶が完全に蘇ると、状況はまるで違っていたんだ」
できれば誰にも言わないで、と前置きして彼が話してくれたのは、次のような話だった。

確かに、大昔にムー帝国は実在し、彼らは前世でそこに暮らしていた。そして、そこで大きな戦いが起こっていたのも確かだ。だけど、おぼろげな記憶が正しいのはそこまでだった。

大きな戦いとは、要するに戦争だった。善と悪、神と悪魔の戦いなんかじゃなく、人間同士の、現代にもあるような普通の戦争だ。そして、彼らは戦士でも何でもなかった。むしろその正反対で、戦争はいやだ、戦いになんか行きたくないという、一種の反戦的な宗教団体みたいなメンバーだったらしい。

「反戦といっても、別に政治運動をするわけじゃなくて、毎日遊んでいるだけだね。要するに、戦争が怖い若者の、逃げ場所みたいなものだった。

そして、その団体の教祖にあたる人が、ある時言い出した。『こんな戦争ばかりの世界は捨ててしまつて、未来の平和な世界で幸せになろうじゃないか』

そうして、彼らはムー帝国に伝わる魔術の儀式だかなんだかをした後、みんな一緒に集団自殺したのだそうだ。

そして、三万年の時を越えて現代に生まれ変わったというわけだ。

「当時、私達はみんな、自分達には何か大きな使命があつて、時を越えて転生したんだと信じていた。すべてを思い出した時はショックだったよ。それ以降、私達はだれも前世の話をしなくなった。恥ずかしくて、誰にも言えやしないからね。

その後、私は他にも色々な時代や場所から転生してきた人がいると知つて、『ムーの広場』を始めた。そんな風に、みんなそれぞれ今の世界での生き方ややり甲斐を見つけていったが、中にはそれができないままの奴もいる。エンヴィアスもその一人だ。君のように、本当に使命を持つて転生してきた人間が憎くて仕方ないんだ」

「そんなことで……」

あたしは、呆然と呟くことしかできなかった。ムー世代の人に会つたのは今日が初めてだけど、『ムー世代』という名前は、あたしたち転生者にとつてやっぱり少し特別な意味を持つていた。なんとなく、一番の先輩、みたいな気持ちでいたのだ。

その先輩が転生した理由がそんな下らないことだったというのだが、彼らの一人に殺したいほど憎まれていた、というのが。

彼女の言葉が脳裏に蘇る。

「私には、何もなかったのに！」

何もないのが、そんなに嫌か。子供の頃の憧れも、今の生活の楽しさも、ぜんぶ脇にのけたくなつてしまふような、そんな重たい記憶を持つていることが、そんなに羨ましいのか。

こんなもの、そんなにいいものじゃない。

「使命なんて、そんなに気にするものじゃない……」

口をついて出た言葉の意味に、あとから気がついた。

そうだ、「使命なんて、気にするものじゃない」のだ。

あたしだつて同じだ。

あたしはクルーディ・メドラウの生まれ変わりだけど、あたしの人生は彼女の付属品じゃない。この世界に生きているのはあたしだ。

あたしは才条アスミなんだ。

さいわい、脳にも骨にも異常はなく、検査を受けたあたしはすぐ帰れることになった。

待つていてくれたみんなとの帰り道、あたしはちよつと歩調をゆるめてみんなから遅れると、リサを呼び止めた。

「あ、さ。ありがとう、助けてくれて。あんなひどいこと言つたのに。ごめんね」

「んーん」リサはひどく照れくさそうに、手を振つてみせた。

「私こそ、アスミの言う通りだつたと思うし。なんかカッコいい活躍して、みんなから憧れられたい、スーパーヒーローになりたいって思つてたよ、確かに」

「……」

「でもさ、人助けしたいっていうのだから、嘘じゃないんだよ」

「うん。わかるよ」あたしは深くうなずいた。

「今なら、わかると思う。リサ、ヒーローになれるといいね。きつと、なれるよ」

「ほんと!?!」

リサが、ばあつと笑う。あたしも、つられて笑つた。

「じゃあ、今度いっしょに退行催眠受けてくれる？」

「それはイヤ」

三十分も飛ぶと、Y浜駅の駅ビルが見えてきた。このあたりに来るのも、けつこう久しぶりだ。三

年前に来たときのことを思い出して、あたしは苦笑いをする。

駅から少し離れた大通りの交差点に、煙が上がっているのが見える。救援要請があったポイントは、多分あそこだろう。建物の間から、緑色のツタのようなもの何本も伸び上がり、不気味にうねっている。

さらに近づくくと、相手の本体が見えてきた。ちよつとしたビルくらいある馬鹿でかい植物で、てっぺんのバラに似た花の中央にはニタニタ笑う不気味な口がついている。数年前から関東一円に出没している。エストロモンガーとかいう怪植物だ。

事前に聞いていたとおり、三人組のヒロインチームが周囲を飛び回って戦っているのが見える。あたしは仲間に合図をして、降下準備を始めた。

ドクター・タリスマンが指を走らせると、あたしたちを乗せた大型の飛行護符が徐々に高度を下げていく。ソルヴェントが水を操って怪物の触手を凍らせ、すかさず飛び降りたハードランダーが体当たりでそれを粉々にする。あたしも続いて飛び降りざまに「糸」を放って、暴れる本体を縛り上げつつ、三人組のリーダーらしき人の横へ着地する。

「NUDEからの要請で助っ人に来ました、エクセブショナルズです。怪我はない？」

「ありがたい、民間人の避難がもう少しで終わりです。時間稼ぎをお願いします」

「了解」

型どおりの挨拶を済ませて、一拍おいてから、お互い吹き出した。

「久しぶり、リサ。ヒーローになれたんだね。おめでと」

「ありがと。あ、でも今は『フューリアス・リサ』だから。そっちこそ、前世の仲間見つかっただってね。あの人達？」

「うん。こつちでまたチーム組んで、やってるよ。みんな頼もしい」

「邪神の手先ってやつはどうなったの？」

「それが、見つけたときにはもうこつちで教団作っててさ。本人は潰したけど、残党が結構いて……」

「大変だねえ。今度そつちも手伝おうか」

指先に結んだ「糸」がビリビリと震えて、限界に近いことを知らせる。さすがに、あの巨体を縛っておくのは無理があったようだ。あたしはリサに目で合図すると、あらためて戦闘態勢をとった。

「あ、あと私は『ウインドウオーカー』ね」

「あ、今風の名前。そういうの、凝る方だと思ってなかったよ。ちよつと意外」

「普通だよ、リサのセンスが古いんだよ。今時、コードネームに本名入れるのはどうかと思う」

「えー、そこは王道でいいじゃん！」

リサの仲間二人……たぶん、ジュンとキサラだろう……が、両手を振っている。民間人がそつちの方へ逃げているから、反対側へ誘導しろ、ということらしい。

「糸」がとうとう一本切れた。指先に鋭い痛みが走り、あたしは急いで残りの糸をほどく。再び暴れ出したエストロモンガーへ向かって、フューリアス・リサが目にも止まらぬ速度で跳んだ。

「ヒーロー、頑張ろうね！ お互いに！」

あたしを追い越していく一瞬、リサが笑顔をこちらに向けて、そう叫んだ。

「……うん！」

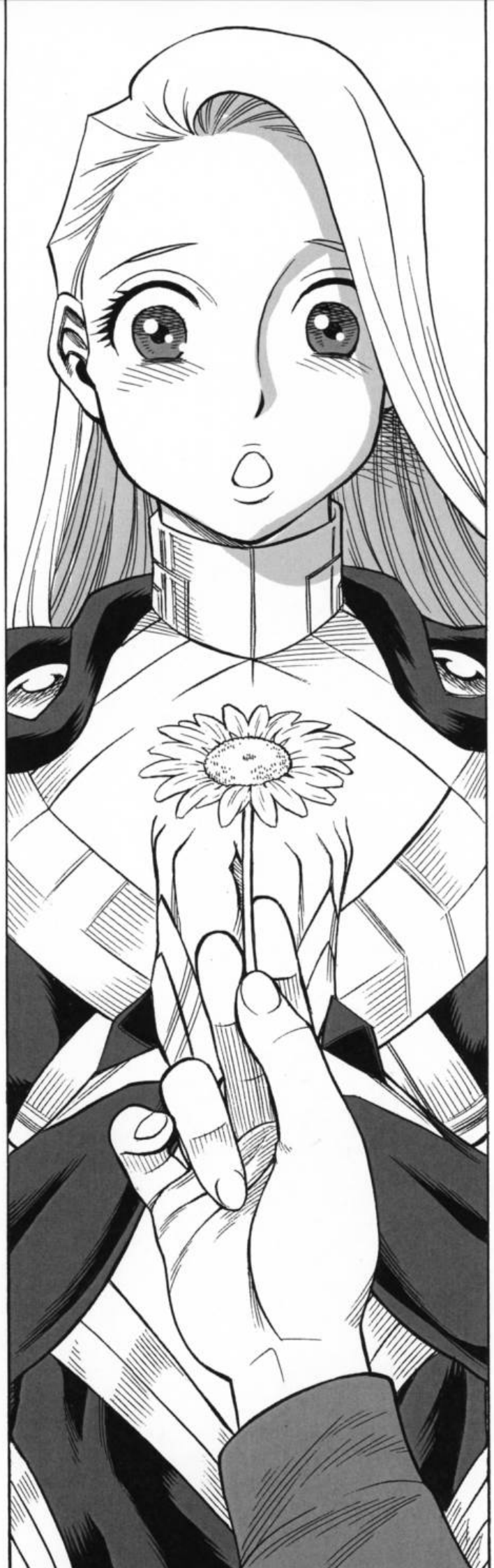
あたしも駆け出す。怪物と戦っている仲間達のところへ。

あたしはヒーローだ。この世界を守るのだ。

完

召ませ花を

ティクラクラン



クララと彼女が初めて出会ったのは、女子トイレの中だった。

用を済ませたクララはハンカチを口にくわえて手を洗っていた。

「へくちっ！」不意にくしゃみが飛び出した。

はずみでハンカチが口からぼろりと取れ、水が渦巻く手洗いシンクに落ちかかった。

「おっと」クララは慌ててハンカチを掴んだ。

バキンと鈍い音がした。

「ばきん？」

クララの手の中に、もぎ取られた蛇口がハンカチと一緒に収まっていた。

蛇口があった穴から猛然と水が噴き出し、クララの胸を直撃した。あわてて手のひらで穴を塞ごうとしたが四方八方に水が飛び散るばかりだった。

「うわっ、うわっ、うわっ！」

動揺したクララはあろうことか、瞳から熱線を放って蛇口を溶接しようとし、余計に穴を広げてしまった。

「やーん、もう！」

いつそのまま放置して逃げようかと考えたその時、入口のドアが開いた。

入ってきたのは初老の女性だった。すらりとした長身で、年のころは五十代後半か。銀髪をひつつめにして、化粧つきの優しい顔立ちをしている。青いつなぎの作業服を着て、工具箱を片手に下げている。

中腰で水流に抗っているクララと目が合った。

「おやまあ」

そう言いながら、女性はさして驚いた表情も見せずクララに近づき、シンクの下に潜り込んだ。

女性が水道の元栓を閉めたらしく、すぐに水流が細り、やがて途切れた。

シンクの下から手が突き出し、ひらひら振られた。「後はやっつくから、早く着替えな」女性が言った。

そう言われて初めてずぶ濡れになった自分に気づき、クララは慌ててトイレを後にした。

女性に礼の一つも言わなかったことに気付いたのは、その日の寝る前だった。

「……で、その人を見つけて一言お礼を言いたい、と」ジュンがシェイクをすすりながら言った。

NUDE本部内のカフェテリア。例によって放課後に顔を出したクララとリサ・キサラ・ジュンのトリオが、思い思いの飲み物を手にダベっていた。

「うん。着替えてからすぐ戻ったんだけど、もういなかったんだ」クララは恥ずかしそうに頭をかいた。

「だいぶコントロールできるようになったつもりなんだけど、反射的に手を出した時なんかは、ついつい力が入っちゃって」

二代目エイズワンドーとしてデビューして一か月。一旦覚醒したヒーローの能力は、常時制御しておかないと身の回りの物を破壊したり、周囲の人々に怪我を負わせる恐れがあるため、オンとオフの切り替えは重要なトレーニング課題だった。

「今聞いた格好だと、たぶん営繕部員だよな」キサラが言った。

営繕部は電気・ガス・水道などインフラ関係のメンテナンスや工事を担当している。基本的に、広大なNUDE本部は最新鋭の自動制御システムで管理され、各種の作業ロボットが日々稼働している。しかし、今回のように突発的な破損の修理や、隙間に挟まったロボットの救出など、人間でなければ務まらない仕事も数多い。もちろん、スタッフのほぼ全員が女性である。

「じゃ、営繕部に行けば会えるんじゃないの？」ジュンがのんびりした口調で言った。

「いや、そんな簡単な話じゃ……」

リサが言いかけたところでクララが立ち上がった。「よし、今から行こう！ 善は急げ！」

「クララ、こういう時の行動力はすごいよな」キサラが言った。

「昼間は全員出払ってるよ」営繕部長はあっさり答えた。「本部全体が仕事場だからね。みんなそこら中を走り回ってる」

その言葉通り、営繕部のオフィスにいたのは部長一人きりだった。部員たちの机の上や壁際には様々な機材が積み上がり、オフィスのか倉庫なのか判別しがたい。そのオフィスの一番奥にあるデスクで、営繕部長は肉付きの良い身体を窮屈そうに椅子に押し込めていた。

「あの、水道修理の担当の人に会いたいですけど……」クララが食い下がった。

「水道関係なら二十六人いるけど、名前は？」

「……」

「……また来ます」リサがクララの手を掴んでオフィスから引っぱり出した。キサラとジュンも後を追った。

四人はまたカフェテリアに戻ってきた。

「何の手がかりもない状態でいきなり突撃してもしようがないだろ」

リサに諭されたクララは首をすくめている。

「そんなこと言っても……」クララが口を尖らせた。「じゃあ、どうやって探せばいいの？」

四人は揃って腕を組み考え込んだ。

「とりあえず、営繕部のスタッフ名簿を一通り調べてみるか」キサラが言った。

ジュンがすかさずノートパッド端末をテーブルに置き、本部内のイントラネットに接続した。

「営繕部のリストなら、私のセキュリティレベルでもフルアクセスできると思うけど……」

ジュンは自分のセキュリティパスワードを入力し、手早く職員名簿を呼び出した。即座に二百人を超え

る名前とIDコードの列がずらりと並んだ。

「まずは水道担当に絞って……」

「次に五十歳以上で……」

クララの証言に基づき年齢でソートをかけると、

最終的に六人に絞られた。

八つの目がノートパッドの画面に集中した。

クララがぼそつと言った。

「……女の人が一人もいないんだけど」

顔写真付きリストに切り替えると、初老の男性の顔が六つ並んだ。

「営繕部の人じゃないのかもね」リサが言った。

「じゃ、探しようがないじゃん」とクララ。

「そうだ！」不意にジュンが手を叩いた。「刑事ドラマでやってたんだけど、捜査に行き詰った時は犯行現場に戻ってみるって」

「聞いたことあるな。現場百回、だっけ」とキサラ。

「別に犯罪じゃないけどね」リサがつぶやいた。

クララが勢よく立ち上がった。

「よし、今から行こう！ 善は急げ！」

クララが壊した水道は既に修理されていた。クララの熱線で広げられた穴は綺麗に塞がれ、真新しい蛇口が取り付けられている。

「一日も経ってないのにここまで直せちゃうんだ……」

「……」クララは蛇口に顔を近づけて感嘆した。

「ウチで使う補修資材は、兵器開発部の発明品を応用してるらしいからな」キサラが言った。「速乾性と防水性とか、すごいらしいよ」

「ファミレスの清掃記録みたいなのはなのかな」

ジュンがトイレ内のあちこちを覗き込んでいる。

「これ何？」

リサは洗面台の隅を指差した。

そこには素焼きの一輪挿しが置かれ、リンドウが生けられていた。リンドウの鮮やかな青紫色と一輪

挿しの素朴な風合いがよくマッチしていた。

「これ、あの人が来る前はなかった」クララが答えた。「で、戻ってきた時にはあったよ」

「じゃあ、その人が置いて行ったのかな」とリサ。

キサラが一輪挿しを持ち上げた。「これ、他でも見たことある気がする……」

ジュンがキサラの手から一輪挿しを取った。

「もしかしてこの人、自分が修理した場所に花を一輪ずつ置いて行ってるんじゃない？」

「てことは、一輪挿しのある場所を探せば、その人がいるのかも」

クララが声を張り上げた。

「よし、今から行こう！ 善は急げ！」

「何回目だ、これ」とリサ。

一時間後、四人はまたカフェテリアでぐったりと座っていた。

本部中に分散するトイレや給湯室などを順に回って一輪挿しを五つ見つけたが、それらを置いた本人は見つからずじまいだった。

「よく考えてみたら、一輪挿しがある場所は、仕事が終わった場所なんだから、そこを探したついでにわけないんだよね」キサラがため息をついた。

「もう、あてもなく探すのはやめようよ」リサが言った。「手がかりは見つかったんだから、営繕部でちゃんと聞いてみよう」

「それはミヤザキさんだね」営繕部長はあっさり答えた。「一輪挿しに花を飾って置いていくのはあの人しかいない」

「やった！」クララは飛び上がって喜んだ「とうとう見つけた！」

「部長、そのミヤザキさんに会えますか？」リサが訊ねた。

クララたちから事情を聞いた営繕部長は、すぐに

ミヤザキに連絡を取った。

クララたちが見守る中、営繕部長は彼女に会いたい人がいる旨を説明した。

「あと一時間くらいでここに戻るそうだ」営繕部長が受話器をクララに差し出した。「今話すかね？」

「えっ、今ですか？」クララは慌てた。「せっかくだから会って直接お話を言いたいですけど……」

そう言いながらも、クララが受話器に手を伸ばしたその時、けたたましい警報が鳴り響いた。

『プロウジョブのヴィランが品川に出現！ エイスワンダー及び全チームはただちに出勤せよ！』

「あーもう、よりによってこんな時に！」

「行くよ、クララ！」

このタイミングでクララと戦う羽目になったヴィランは、不運だったとしか言いようがない。

翌日。

クララたち四人は例によってカフェテリアに集まっていた。

ミヤザキが仕事を終える時間を待って営繕部に向かう予定だった。キサラたちまで付き合う義務はないのだが、ここまで来たら本人を見てみたいという。クララはテーブルに両肘をついて顎をささえながら、ノートパッドに表示されたミヤザキのプロフィールをぼんやりと眺めている。

「WWって何だろ……」クララがつぶやいた。

「え？」リサが聞き返した。

「ミヤザキさんのIDナンバー、頭についてるアルファベットは何の略なんだろ」

NUDEに所属する者のIDナンバーの頭には必ず二文字のアルファベットが付与されている。

「さあ、見たことない略称だけど……」

クララはそう言いながら、手元のスマートフォンをぼちぼちと操作して検索してみた。

しばらく画面を見ていたクララが急に声を上げた。

「ねえ、これ見て！『Wet Work』汚れ仕事、暗殺行為だつて！」

ジュンが画面を覗き込んだ。

「えー、旧ソ連の秘密組織KGBが暗殺任務の別名として、えーまさかー」

ひとしきり盛り上がりつつあるクララとジュンの後頭部を、キサラとリサが呼吸を合わせてパソコンとはいた。

「んなわけあるか」キサラが言った。「そんなもん、誰が考えたって『Water Works（水道工事）』の略に決まってるだろ」

「だよー」クララは頭をかいた。

クララは冗談っぽく振る舞っていたが、本当に気になる記載は別にあつた。

あの時會つたミヤザキはどう見ても五十歳より下には見えなかった。ところが、プロフィールによると宮崎の年齢は三十六歳だという。不自然なギャップがある。

彼女は単なる営繕部員ではないのかもしれない。

一言お礼を言いたい気持ちに変わりはないが、それとは別の興味が内心にわき上がっていた。

「私を探したのはあなた？」

不意に背後で声が出た。

クララがはっとして振り向くと、すぐ目の前に白髪交じりの女性が立っていた。あの時と同じ青いつなぎを着て、あの時と同じ工具箱を手に下げている。

ミヤザキその人だ。

クララは慌てて立ち上がった。ベコリと頭を下げた。

「あつ、あの、私、遙クララといいます。私……」

ミヤザキはにっこり笑った。

「覚えてる。トイレで蛇口を壊した子でしょ。ここで私が戻るのを待ってるって部長に聞いたから」

キサラたちも興味津々の顔でミヤザキを見つめていた。

クララはあらためて体の前で手を組み頭を下げた。

「あの、この前は助けてもらつて、本当にありがとうございます。あの時は何にも言わずに出て行くつもりで済みませんでした。」

ミヤザキはひらひらと手を振った。

「いいよ、お礼なんか。仕事なんだから」ミヤザキの声は明るかった。「でも、すごく嬉しい。こんな裏方をやっていると、人から感謝されることなんて滅多になくてね。しかも、礼を言うためだけにわざわざ探してくれるなんて」

ミヤザキは手を差し出し、クララと握手した。

「私こそ、どうもありがとう」

クララは顔を赤らめた。

キサラたちもほっとした表情を浮かべた。

不意に、ミヤザキが工具箱の蓋を開け、中から小さなものを取り出した。

ガラス製の一輪挿しだった。

「ちよつと見てね」

ミヤザキは一輪挿しをテーブルに置くと、右手を軽く握って前に突き出した。ちよつと、見えない傘の柄を握っているような感じだった。

クララたちは何が起ころのかとミヤザキの拳を見守っていた。

ミヤザキは自分の拳をじつと見つめている。やがて、彼女の拳の中で何かが動いた。

緩い輪になった親指と人差し指の隙間から、何やら白いものが見えた。

じりじりと押し出されるようにして現れたのは、白いマーガレットの花だった。

中央のおしべやめしべは精密で、明らかに造花ではない。花は更に押し出され、花の裏側から伸びる茎も姿を現した。

マーガレットの茎が十センチほどに伸びた頃、ミヤザキは左手で花を抜き取り、一輪挿しにそつと挿した。

「これが私からの感謝の気持ち」

クララたちは呆気にとられて言葉もなかった。

「しゃれた手品だったね」

「全然タネが見えなかった」

「いつもあんな風に花を隠し持ってるのかな」

ミヤザキが立ち去った後、キサラたちの会話を聞きながらクララは考え込んでいた。

クララの透視能力は全てを見ていた。

タネなどなかった。

マーガレットの花はミヤザキの手のひらから直接生えていた。彼女はそれをむしって一輪挿しに刺したのだ。

さらにもう一つ。成長するマーガレットがものすごい勢いでミヤザキの血を吸い上げているのも見た。

ミヤザキは、自分の肉体を養分として花を咲かせる能力の持ち主だったのだ。

実年齢に比べて外見が極端に老けているのはもしかしたら……。

この能力が営繕の仕事に役立つとは思えない。能力ゆえにNUDEに所属しているのか、営繕のため雇われた女性がたまたま能力を持っていたのか。

たしかに彼女は単なる営繕部員ではなかった。

考えるほど謎は深まったが、いたずらに詮索したところで誰かが得するとは思えない。感謝の気持ちは伝えたのだから、この話はこれで終わりにしよう。

クララはノートパッドのプロフィール欄を閉じた。

画面が氏名とIDナンバーの一覧表に戻った。

クララは気づかなかつたが、IDナンバーの頭が『WW』なのはミヤザキだけで、他の部員たちは全員『MW』だった。

初老の女性はコンビニを出て夜道を歩き出した。

手には買ったばかりの弁当と飲み物を下げている。

少し遅れてコンビニから出てきた中年の男も、女性を通つたのと同じ道を歩き始めた。

実は男は、初老の女性がレジで精算する前から彼

女のことをじっと観察していた。

中年男は初老の女性を尾行していた。

初老の女性は、自分が尾けられていると気づいていないようで、知ってか知らずか次第に人気がない方へ歩いていく。

初老の女性は薄暗い公園の中に入った。乏しい街灯をたよりに、女性は公園の奥へと足を進めた。

その間も、中年男はつかず離れずの距離を保って初老の女性の後を追った。

周囲に人の気配が全くないのを確認し、中年男は歩調を速めて初老の女性との距離を一気に詰めた。

「おい」

中年男に声をかけられ、初老の女性は振り返った。男の存在に今気づいたかのような表情をしている。

「財布を出せ」中年男はナイフを握っていた。初老の女性はわずかに首をかき上げて中年男を見つめた。その目からは何の表情も読み取れない。

「聞こえなかったのかよ。死にたくなかったら財布をよこせ」

中年男がこれみよがしにナイフを振ると、初老の女性はちらりと周りに目をやった。助けを求める相手を探しているように見えた。

初老の女性は中年男に目を戻すと、鞆を開けてゆつくりと財布を取り出し、そつと中年男の方に差し出した。

中年男は初老の女性に歩み寄り、手を伸ばして財布を受け取ろうとした。

初老の女性は急に財布から手を放し、空いた手で中年男の手を掴んだ。

「なっ！」中年男は手をもぎ放そうとした。

しかし、初老の女性の握力は思いのほか強く、彼女は手を握ったまま中年男の目をじっと見据えた。

「てめえ！」

中年男はナイフを振りかざし、女性目がけて振り下ろした。

ナイフを握った中年男の手が急に止まり、あつげにとられたような表情で口をばくばくさせた。

中年男の胸が急に膨らんだ。

かっとな開かれた中年男の口から何かはみ出した。藤の花だった。

「かはっ！」

胸の膨らみが喉にまで広がり、藤の花が際限なく男の口からあふれ出した。

その間も、初老の女性は中年男の手を離さず、彼の瞳をじっと覗き込んでいた。

肺と気管を藤の花に占領されて呼吸できなくなった中年男は、全身をがくがくと震わせ、崩れるように膝をついた。彼はもはや呻き声すら出せず、涙と鼻水を滂沱と流しながら初老の女性を見つめるばかりだった。

口中にひしめく藤の花に耐えかねた顎の関節がぼくりと外れるのと同時に、中年男は横倒しになった。初老の女性はなおも手を離さず、仰向けになった中年男に覆いかぶさるばかりの姿勢で彼の目を見下ろしていた。

中年男の全身が激しく痙攣し始めた。彼の身体が動かなくなり、彼の瞳孔が開き切るまで、初老の女性も動こうとしなかった。

中年男の死を見届けると、初老の女性は無駄のない動きで死体を近くのベンチの前まで引きずっていった。

初老の女性は中年男の口からあふれた藤の花を束にして握り引きずり出した。

引っ張られるにつれて、一メートル近い長さの根が束になってずると姿を現した。

初老の女性は藤の花を近くの藤棚まで持っていく、そばの草むらに放り込んだ。

中年男の死体はベンチに引っ張り上げ、いかにも一休みしているかのような姿勢でベンチにもたれさせた。

後始末を終えた初老の女性は財布を拾い上げると足早に公園から立ち去った。

初老の女性が隠蔽にかけた時間はわずか数分。『汚れ仕事』に慣れ切った手際の良さだった。

だから好きなんだけどね



神野オキナ

聖スミレ学院の地下に埋まっていた古代の神、ヤヌエスの像が引き起こしていた一連の事件が解決して三週間が過ぎた。

冬が近い。

だが二代目エイズワンダー、クララとメイにとっ

ては手を繋ぐだけで暖かい思いをする日々だ。その日も、クララとメイが学校内の食堂で食事を、と思つて座つたテーブルの前に、いつの間にか黒髪のロングヘアで、少々キツイ目付きの少女が現れていた。

陽がさんさんと差し込む冬の食堂で、人の行き来はふたりとも死線の隅で見えていたはずなのに、だ。「！」

それまで全く気配を感じなかった存在の出現に、メイとクララは一瞬、緊張するが、メイはすぐに溜息をついた。

「ブルースカル、どうしたの？」

「え？ そうなの？」

こういうことに関しては完全に「鈍い」クララがキョトンとする。

「だってこの前は全然違う……」

「いつも同じ格好だとバレるだろ？」

小さな苦笑を浮かべたものの、全体的にブルースカルこと、世持ヒロヤには元気がない。

いつも傲然と胸を張り、冷徹に人を見下しているような雰囲気はなく、ふわふわと落ち着かない感じで視線を彷徨わせ、身体を強張らせている。よく見れば目が潤み、頬が上気していた。

「どうしたの？」

「彼 ブルースカル 女がずっと怒ってるんだ」

いつも傲岸不遜なイメージの彼には珍しい、ほとほと弱り果てた表情で、ヒロヤは言った。

「どうしても君と話をつきたいらしい」

「なんで、ブラックボーンが怒るとクララに話をつける、つてことになるの？」

メイの言葉に、世持ヒロヤは「この前……クララが僕をレイプしただろう？」とさすがに声を潜めて告げた。

「！」

クララの身体が強張り、表情も張り詰める。「あのことで怒ってるんだ」

「で、でもそれはクララの意志じゃなくて！」

擁護しようとするメイにヒロヤは片手を上げて「判つてる」と制した。

「あれはヤヌエスの像が君の心の中にあるものを増幅させただけで、像がなければ起こらなかった、単なる事故……何度もそう言ったんだが」

ヒロヤは溜息をついた。「頼む、彼女と会つてやつてくれ。話をつけたいつて……」

ふら、とヒロヤは倒れそうになった。

慌ててクララが立ち上がつて肩を支える。

「大丈夫？」

そういつた瞬間、クララの鼻孔をヒロヤの股間から立ち上る匂いが刺した。

精液に似た匂い。

射精する前の先走りの匂い。

女性の愛液とほぼ同じ成分の匂い。「だ、大丈夫……」

そういえば、ずっとヒロヤは女装した格好のままスカートの前を、持つている教科書の束で押さえている。「あ、あの……」

「匂うか……やっぱり……先週から……射精コントロール、着けられて……」

そのままヒロヤはクララに抱きついた。

「勃起は持続してるけど、射精させてもらえないんだ……大丈夫、一時間ごとに解除はされるから……」

身体が細かく震え、男の愛液の匂いが濃厚になる。

少女にしか見えない外見の（何しろどういいうわけか、ヒロヤは骨格レベルでは女性なのだ）少年だけ

に、落差がクララには激しく思えた。「今はゴム、着けて……から、外には漏れない……って思つて……たけど……君は……エイズワンダー、だものな……」

喘ぎながら見上げたヒロヤの表情を見て、何故かクララは心臓の鼓動が跳ね上がり、今はない筈の器官に血が集まってくる幻を感じた。

この少年を組み敷いた記憶が明確に蘇ってくる。

恋人であるブラックボーンをソウルラテックスでパッケージングして、口元にこの少年のペニスを突っ込ませた。

自分はヤヌエスと同化したことで、細胞レベルで一体化したソウルラテックスの疑似ペニスを生やし、いつも頭が良くて傲慢な、少女と見紛う少年を四つん這いにして獣のように犯した。

少年だけではない。

NUDEの本部では、ペニス型の寄生生物に乗っ取られ、職員の大半を犯し、同じヒロインたちも犯した……本来なら「覚えていない」ことだが、クララはヤヌエス事件のあと、記録を読んでいるし、映像も見ている。

母親であるアテナ……先代エイズワンダーさえ犯したことも。

その日から、自分には存在しないペニスを感じ、恋人であるメイ……彼女の処女もペニス型寄生生物に乗っ取られた時にクララが奪った……に頼んで、毎夜、ソウルラテックスによるペニスを生やし、彼女を犯し、彼女が気絶するまで責め立て、それでも納まらないエイズワンダーの体力の赴くまま自慰行為にふける日々だ。

これで今、学校に出てこられるのは半分意地だが、続けていればやがて倒れるかも知れないとうっすら自覚はしていた。

何よりも周囲の女性とに対する自分の意識が変わっているのが判る。

男のように、伸びやかな肢体を、下半身を、胸元

を目で追うようになっていた。

両性具有化による精神の混乱状態。

そうNUDEのカウンセラーは診断した。

だがそれよりも最も重いものは、クララの中にある罪悪感と背徳感だ。

どちらも減ることがなく、彼女の背中にのしかかり続けている。

「もつと解放されるべきかもね……パートナーと相談しなさい」

とは言われたが。

「ごめん……君に不愉快な思いをさせた……」

離れようとするヒロヤに、

「あのひよつとしてそれって……おしおきななの？」

「……」

黙ったまま、少年はこくと頷いた。

「あの子が悪いんじゃないんだ、そうしないとダメなんだ、元々精神に安定を欠いてるところへ、『ご主人様』の僕を君が……その……お……いや、その組み敷いたものだから、どうすればいいのか、気持ちの整理が……着かない……んだと思う……」

「……」

見上げた少年の潤んだ瞳を見て、思わずクララは生唾を飲み込んだ。

存在しない器官に流れ込む筈の血液は、彼女の女性器を充血させ、潤ませている。

はつきりと下着が濡れるのを感じた。

今すぐ、この少年を組み敷いて犯したい、そんな暗い衝動が頭の中に駆け抜け、それを持ち前の正義感が瞬時に踏みつぶす。

「とにかく、来る気があれば、明日の夜七時、この座標に……頼む」

荒い息をつきながら女装少年はそう呟くように言い、来た時とは違い、おぼつかない足取りで食道を後にした。

☆

「行くべきじゃないわ」

ヒロヤの背中が雑踏の中に消えるのを見計らって、

メイは即決した。

「彼女は危険よ」

メイはあの事件以後、NUDEに正式所属となって

ブラックボーンも含めた各ヒーローヒロインの資料を調べている。

それは、表向き「エイスワンダーとしてのクララ

のことを知りたい」からでもあったが、同時に、彼女が引き起こしたこういう事件から彼女を「守る」

ためでもあった。

だから、ブラックボーンの正体も知っている。

初代エイスワンダー、アテナを単なる姉弟子ではなく、「姉」として実の妹のように慕い、かつては第二のエイスワンダー候補と言われながら、悪の手に落ちてアテナを巻き添えにし、クララに倒されたハイパートピアの戦士、アルテミス。

何故現在、ブラックボーンを名乗り、素顔を隠し、ブルースカルこと、世持ヒロヤと性的な意味も含めた主従関係に納まったかは判らない。

そもそも世持ヒロヤ自身が経歴がNUDEでさえ入手出来ない謎の存在だ。

二重、三重の意味で、メイは危機感しか感じない。

それは先ほど、この学校の生徒の制服を着けて女装したヒロヤを受け止めたクララの目によぎったものを見た瞬間、確定していた。

それが何なのかを確定することを、メイは本能的に避けたが、結論だけは出していた。

クララを、ブラックボーンの所へ行かせてはならない。

「……」

クララは席に座ってすっかり醒めてしまったカレ

ーを前に、困った顔になった。

（ああ、もう！）

最初のレイプ同然に処女を喪失して以来、一ヶ月以上、そしてはつきり互いの意志を確かめて肌を毎

晩重ねるようになって一ヶ月弱。

メイはクララが何を言い出そうとしているのか、

言い出せないのかを完璧に把握していた。

「……行くのね」

「行きたいの」

しゅん、としよげた顔でクララ。

この二代目エイスワンダーは善人過ぎて、そして

メイに対する愛情も無制限で、だから、彼女が嫌がることは絶対にしない。

が、彼女自身の中にある正義感も曲げられない、

厄介なスーパーヒロインなのだ。

「私の、罪だから」

「罪じゃない、ヤヌエスと宇宙生物があなたにや

せたこと、悪いのは奴ら」

「でも……私、本当に酷いこと、したんだと思

う」

クララはぼつんと言った。

「寄生生物に乗っ取られたときも、ヤヌエスの神像

に操られたときも、わたしは結局、快楽を貪った。

記憶にないから、操られたから、私に責任がない、

なんておかしい」

「じゃあ、あなたは無限に謝り続けるの？」

「犯してしまった罪から逃げることは出来ない、私

は向き合い続けるしかないの」

「相手に許されるまでそうするの？」

「許されようが、許されまいが、よ」

そう言ってクララは切なく笑った。

罪悪感に押しつぶされそうになりながら、自分の

罪と向き合う少女の顔。

「……まったくあなたって人は」

メイは呆れたような、嬉しいような複雑な笑みを

浮かべてその腕に抱きついた。

「だから、好きなんだけどね」

「ありがとう」

クララがメイの唇に軽くキスした。

「……私の考えでは、何を要求されるかの見当は付

くわ。それは……あなたも判つてるでしょう？
一発二発ひっぱたかれただけじゃすまない」
「うん、ポッコポコにされると思う……でも、それぐらいですむのなら、あの人たちの中から、黒い感情が吐き出された、あのふたりがまた仲良くなれるなら」

(ああもう！)

メイは天を仰いで絶叫しなくなった。

こういう少女なのだ。クララは。

愛と正義の使徒、エイズワンダー。

やっつけられない、という思いがある。

手足を縛り上げ……でも無駄だから、いつそ引き

ちぎって何処にも行けないようにしたいという残酷で投げやりな思いもある。

だがメイにとつても結論は決まっているのだ。

クララと共に行く。

それ以外はありえない。

「……判った。あなたひとりじゃ行かせない。私、

^{サイドキック}
相棒なんだから」

「メイ！」

そしてメイの愛しい少女は、その豊満な胸に眼鏡の恋人の顔を埋めさせて喜んだ。

☆

夜。

指定された座標は深い森の中にあった。

エイズワンダーの姿になったクララに、ハニー・

ザ・ハガーの姿で抱きついた格好でメイがその場所

に来ると、すでにブラックポーンが待っていた。

マスクの中から、こちらを殺しかねない殺気の死

線が送られてくるのが上空からでも判った。

「こ、こんにちは、ブラックポーン」

降り立ったクララがひよこつと頭を下げると、ブ

ラックポーンは冷たい無表情のまま、

「着いてきなさい」

と言つてかがみ込んだ。

ただの地面だと思つていた場所は立体映像で、それが消えて、巨大なハッチが現れる。

その巨大なハンドルを片手であつという間に回し、分厚い扉を油圧式ピストンが押し上げる。

地下に続く階段と、そこから先は通路があつた。

「これは……」

「私たちの隠れ家のひとつ……歩くわよ」

確かに、それから一時間近く、無言で三人は階段を降りて、延々と続く薄暗い通路を歩き続けた。

「ここ」

ブラックポーンが立ち止まる。

通路はまだ続くが、その途中にある扉だつた。

「あの……ここ、何処なんですか？」

「NUDEの地下にある『セックスチェンバー』のさ
らに下」

セックスチェンバー、とは NUDE が所属するス

ーパーヒロインたちの欲求不満を解消するために作

つた特別な防音防爆のベッドルームのことだ。

特殊な性癖などを持つ、あるいは交際を表沙汰に

したくないヒーロー、ヒロインたちがスキヤンダルの

気兼ねなく愛し合えるように用意された場所であ

る。

クララもいずれ、と思つていたがなかなか学生に

は申請がしづらい施設でもある。

「呆れた、どうりであなたたちの居場所が特定出来

ない訳ね」

いいながらメイは扉をくぐる。

中はパーカウンターと応接セットのあるベッドル

ームだつた。

奥にはキングサイズのベッドがあり、照明は明る

い。

「座つて」

「……はい」

しゅんとした表情でクララは身を固くしながら三人掛

メイもすぐ隣に腰を下ろす。

「正直に言うかね、私、自分自身の感情をもてあま

しているの」
ふたりのためにクラブソーダをグラスに注ぎ、前に置くと、ブラックポーンは向かいに座つて長い脚

を組んだ。

「あの時、ソウルラテックスで拘束されて、口でピ

ロヤのをしゃぶらされながら、彼が犯されているの

を聞かされた時、本当にあなたを殺したいと思つた」

「……」

「私のヒロヤが、私じゃない女に犯されて声を上げ

てる。ペニスから何度もザーメンを迸らせて、喘い

で、泣きながら私の名前を呼んで『ごめん』って何

度も言いながら……私は身動き出来ないまま、それ

を聞かされていた、見ることも出来なかつた」

ブラックポーン自体は、強いパーボンをザツクリ

と炭酸で割つて一気に煽る。

「でもね、あなたたちが結ばれるのを見たとき、ふ

たりの間の思いを理解したわ。その純粹さと崇高さ

もね……だから、悪いのはヤヌエスだと、心底思つ

て撃ち碎いてやつた。諸悪の根源、全ての原因をね」

「……」

「それで終わった、はずだつたのよ」

ブラックポーンは溜息をついた。

「あのあと、帰つたあと、ボロボロになったヒロヤ

の身体を洗つて、クタクタになつた彼をベッドに運

んで寝かせてやりながら、自分の中にまだ怒りがく

すぶっているのを感じたの」

それは、目を追うごとに膨れあがつていったとブ

ラックポーンは語つた。

「私のご主人様はレイプされた。私も、レイプされ

た。その原因はあの神像だけど、直接行爲を行った

のはあなた、エイズワンダー、遙クララ」

「！」

殴られることを覚悟して、クララが身体をすくめ

メイは膝に置かれているクララの手をぎゅゅと握った。

「怒りだと、最初は思った。理不尽なものだ……でも、段々、違ふと思うようになった。怒りだけじゃない、哀しみとか絶望とかだけじゃない」

「そう言うところブラックボーンは立ち上がって、応接セットのテーブルに片膝を載せて身を伸ばし、クララの頬に優しく触れた。」

「思わぬ行動に呆然とするクララに、ブラックボーンは告げた。」

「私に、肉体の快楽を教えてくださいましたのは、あなたのお母様、先代エイズワンダー、遙アテナ……私は、奇妙な妄想に取り憑かれはじめてるのを自覚したの」

「？」

「私はあなたのお母様が本当は欲しかった。もしもペニスがあればあなたのお母様を孕ませたかったし、逆なら、私が子供を産みたくった、セックスしたかった」

「アルコールに濡れた唇が淫猥な笑みを浮かべる。」

「夢を叶えさせて頂戴……あなたたちが、欲しいの、クララ、そしてメイ」

「！」

「ここで自分の名前が出てくるとは思わなかったメイが驚く。」

「私たちとここでセックスして。全員とあらゆる組み合わせで」

「え……それは、そのつまり……」

「ええ、ヒロヤを犯し、ヒロヤを受け容れるの……ここに」

「そう言うってアルテミスの手がクララとメイの股間に滑り込んだ。」

「ソウルラテックス越しなのに直に肌に触れられるような電撃がメイの身体を貫いて彼女はのけぞった。」

「クララも同じく、両の手足を突っ張るようのけぞって、獣の様な声をあげる。」

「気がつけば同じ声がメイの口からも漏れていた。おかしい。」

「脳が警報を鳴らす、それはあつという間に快楽の中に飲み込まれる。」

「こんなに自分は快楽に弱かったらどうか、とメイが自問する暇さなかつた。」

「あつという間に繊細な動きの指先が、同性同士の弱点を突いて、性の喜びの深淵、その入り口に立つたばかりの少女たちを、抵抗する余裕も与えず絶頂へ導いていく。」

「凄いでしよう？ ふたりとも？」

「クララの股間を布地越しに、メイの股間をソウルラテックスの衣装越しにそれぞれ優しくこねくりながらブラックボーンは優しく唇をふたりの頭の間に寄せて囁く。」

「私が洗脳されたときに使われた コントロールディレクター 装置の中に

枢部分を改良して、この部屋全体に影響が出るように設置してるの」

「ほら、とブラックボーンは自分の股間にもクララとメイの指を誘った。」

「そこはもう愛液が溢れ、引き締まった太腿の内側を流れているのが判る。」

「これを使うとね、この部屋にいる間は全てのセックスに関わる感覚が何百倍にもなっているの、それに……私、判るの、あなたたちは男の子も快楽の対象としてだけならイケるって……だから、互いにペニスを生やしあつて楽しんでるんでしよう？」

「な……ど、どうして……」

「クララの家は完全防音じゃないわ、アテナ姉様が最近寝不足になるぐらい激しいでしょう？ 家の外にいる私にも聞こえるわ」

「その言葉に、クララの乳首がますます硬くなってエイズワンダーの衣装を内側から突き上げた。」

「あ……だ、だめ……クララ……この、ひと……すごい……上手う……」

「メイ……わたし、わたし、もう……もう……」

「ふたりは互いの名前を呼びながら手指を絡め合い、ソファの上でのけぞり、再び絶頂を迎えた。」

「くひいっ！」「はくうっ！」

「のけぞった身体がガクガクと震え、二人は自分の中からブラックボーンの指が引き抜かれたとき「あつ」と思わず腰で追いかけてしようとした。」

「ああ……凄……ふたりともこんなに濡れて……」

「指を引き抜いて、ブラックボーンは愛液に濡れそぼった指先を舐めた。」

「だめ……メイ、私、スイッチ、入っちゃったみたい」

「クララの目が潤んで隣のメイを見つめる。」

「私も……クララ、私も、だめ、溜まらない、セックスしたい」

「メイが減多に口にしない言葉を吐き出し、それだけでまた快楽の電流が流れて、ぶるつと小さな身体を震わせた。」

「さあ、ふたりとも、楽しみましょう」

「ブラックボーンの言葉に、ふらふらとふたりは頷いて、ベッドに向かう。」

「でも……ブルースカル……ヒロヤは？」

「クララの言葉に、嬉しそうにブラックボーンは微笑んだ。」

「もう、待っているわ」

「そういつて、キングサイズのベッドの側にあるクローゼットの扉を開けた。」

「！」

「両手を後ろで頑丈な革手錠に縛られ、細い両脚は太いバンドでまとめられて、Z字開脚、睾丸を締め上げて射精させないためのコックロック、龟头周辺にはコンドームで固定された小さなローター。引き締まった尻奥にはアナルバイブ。目隠し、ヘッドフォン、ボールギャグを噛まされ

たブルースカルがそこにた。

マスクだけはそのまま、他が全裸というのが異様だった。

首輪を兼ねた両腕の付け根と薄い胸板を走る革のハーネスを填められ、そこから伸びる数本の鎖が壁に留められていて、膝立ちになった少年を引っ張っている。

そうでなければ、とつくに少年は前のめりになったのたうっているだろう。

同時にそれが出来ない為、ペニスに決定的な快楽を与えられないでいる。

きめ細やかな肌にはびっしりと汗の玉が浮き、ボールギャグからはだらだと涎とうめき声が流れてる。何よりもクララが引きつけられたのはその股間だった。

この前犯した時とは打って変わって、それは力強く勃起肥大化し、まるで何かの植物の根のように血管が浮いたものになっている。

張り詰めていた。

「大きいでしょ？ 男の子ってね、アナルを犯されるときは牝になるの。その間は刺激しないと勃起しないまま……今は違う」

ブラックポーンは首から下の衣装を引きちぎりがら言った。

「二週間もセックスしてないうえに、オナニーも出来ないから、もう貯まりに貯まってるわ……ほら、こんなに血管が浮いてるでしょう？」

食堂での少年の上気した頬と潤んだ目が、クララとメイの脳裏によぎる。

「三日前、死ぬほど手だけでしごいで射精させまくって、それからずっとカウパーだけだから流しながら二時間おきに勃起させられて、でも射精出来ない状態で三日間放置して、さらにこの状態にして半日にしてあるわ……こうするとね、男の子って射精する以外、もう何も考えられなくなるの」

「でも……彼はご主人様じゃ……」

「ええ、ご主人様。でもごの奉仕するだけが奴隷じゃないわ。彼を犯すのも奉仕のうち。私たちは自分のしたいことは全部する、それは攻守なんて関係ないわ」

いいながらブラックポーンはヒロヤの後ろに置かれていた水槽を引っ張り出した。

どろりとした透明な液体の中には、ペニスが浮かんでいる。

大きさはかつてのクララに寄生した生物と同じ大きさ。

思わず、クララの喉が鳴った。

「ヒロヤの作った特製のバイオデイルド……まずは、私が使うわ」

ブラックポーンが透明な粘液に満たされた水槽に手を入れ、ペニスの一本を引き上げると、ハイパートピアの住人特有の、無毛の股間に押し当てた。

「おく……うううっ！」

快楽に唇を噛みながらブラックポーンはヌラヌラと汗ばんだ身体をくねらせた。

バイオデイルドが自分の神経と一体化していく時に身体を流れる、快楽とも苦痛ともつかない感覚が彼女を襲っているのだが、それすら今の情欲に爛れたクララたちには淫猥に美しく踊る踊り子のよう

に思える。

「んおっ！」

腰を突きだして、ブラックポーンはのけぞり、固まった。

やがてうなだれていたペニスがゆっくりと力強く立ち上がるとともに、ブラックポーンは不敵な笑みを浮かべて胸を張った。

クララよりもひとまわり大きく、重い水蜜桃が揺れる。

に見とれてしまった。微笑んで、ブラックポーンはヒロヤのボールギャグを外した。

「だめえ、もうダメだよお」

ヒロヤが叫んだ。

「アルテミス、射精させてえ、チン〇、チン〇射精させてえ、どくどくさせてよおっ！」

ブラックポーンの本名を叫び、あの傲慢なヒロヤからは信じられないほどの、切なくて甘い声をあげ、少年は身をくねらせる。

「お〇んこ欲しい、お〇んこおっ！ お〇んこおっ！」

それだけでクララの体温があがるのを、そばに立ったメイは感じた。

メイの股間から新しい潤みがしたり、太腿を流れ落ちていく。

それを見て、マスクのみで全裸になったブラックポーンは微笑んだ。

「クララ、さあ、ベッドの上が上がって」

上気した頬で、クララは頷いた。

「メイ……一緒にあの……後ろから抱いてて、くれる？」

「うん……」

普段なら男にクララを犯されるなんて絶対に許さない筈のメイの脳が、快楽に爛れて頷くことを許可した。

先ほどブラックポーンの指先から与えられた快楽の余波がまだ脳を揺さぶっている。

さらに言えばこれはクララが望む贖罪でもあるのだという言い訳が、彼女の頭の中で快楽を更に肯定し、補強していた。

メイが正座してクララの上半身を持ち上げるようにし、クララは誰に言われるでもなく、両脚を広げた。

すでに横にずらされた股間の布地から、無毛の丘の真ん中が膨らみ広がっていく。

「ヒロヤ」

細い少年の背後に回り、ヘッドフォンを外してブラックボーンは囁いた。

「出したい？」

「出したい、出したいっ！」

「じゃあ、出させてあげるわ」

ブラックボーンは首輪の鎖を外し、軽々と少年の身体を抱え上げた。

そのまま背後から抱えてベッドの上上がりながらコンドームを引きちぎると、三個のローターが絨毯の床に跳ねた。

ペニスと陰囊を根元から縛り上げ、射精を封じるコックロックを半分だけ外し、尿道に突っ込まれた細い専用のディルドーをゆっくりと抜く。

「あ……………ひいッ」

ヒロヤの細い身体が震え、さらにブラックボーンがアナルパイプを引き抜くと、完全に少女のような甘い声を上げた。

「出させて……………出させて……………」

蚊の鳴くような声で繰り返すヒロヤを抱え上げたまま、ブラックボーンは己のバイオディルドーを少年の肛門の中に埋め込んだ。

「あごがぐあ！」

ヒロヤの細い肢体がのけぞる。

中性的な、筋肉の薄い身体は股間の隆々としたペニスを除けば少女そのものだった。

「アナルは……………アナルは……………ああいつ、

射精させて、射精してもいいからっ！」

半狂乱の少年を見て、クララは、

「可哀想」

と呟き両手を広げた。

「ブラックボーン、彼を頂戴」

発情と愛情に潤んだクララの目を見て、ブラックボーンは言った。

「ええ、アテナお姉様」

ベッドの上にヒロヤを貰いたまま上がると、ブラックボーンはヒロヤのペニスを握り、クララの入りに口まで誘導するとコックロックを一瞬で取り去りながらさらに深く腰を進めた。

「あぐおあああ！」

「あひいっ！」

ペニスが肉に包まれる感覚に鳴き声をあげる少年と、受け容れた少女の声が重なって響いた。

慌ててクララが自分で自分の口を塞ぐ。

「ち、違う、この中、アルテミスじゃない……………だれ？ 誰？」

戸惑うヒロヤの声を、激しく腰を使い、そのアナルを穿つことでブラックボーンが黙らせる。

「いい、ケツマンコいいっ！ 牝になるっ、牝になつちやうよおっ！ 肉オナホにチン〇ハメながら、牝になつちやうううっ！」

「ダメよヒロヤ……………ほらっ」

ヒロヤの頭からヘッドフォンを完全に外して部屋の隅に放り投げると、ブラックボーンは囁きながら固く尖った少年の乳首をつねった。

「あくあっ！」

自分の秘肉を抉る少年のペニスがさらにひとつ跳ねるのを感じ、それまで精一杯の恥ずかしさで口元を覆っていたクララの手が外れ、声が漏れる。

「え……………あ……………く、クララ？」

「おつきい！ ヒロヤ君の気持ちいいっ！ 男の子、男の子いいっ！」

声を抑えることもペニスの快楽を拒否することも出来なくなつたクララが、少年の頭を抱き寄せて、目隠しが外れる

「クララ、クララがあ……………」

クララが少年とキスをしながら、その豊満で、しかしまだ少し硬さの残る二つの果実の先端をついばまさせているのを見ながら、メイは激しく自分の股間を擦り上げる。

「欲しい、私もペニス欲しいっ、ペニス欲しいっ！」

それがクララのペニスのことなのか、それとも今クララを犯しているヒロヤのペニスか、彼を犯しているブラックボーンのペニスか。

何もかもが渾然となつて淫欲に爛れた脳で、メイは叫んだ。

そのままメイは行き場のない情欲のまま、クララの乳房を、力の限り驚ぶかみにする。

痛みさえ快楽に変わつてクララが吠えた。

「中で、おちんちん、おちんちん膨らむうっ！ 出るの？ 出ちやうの？」

「出る、でるでる出るううっ！」

同時にヒロヤはクララの中に大量に射精した。

「熱いっ、熱いっ！」
クララがヒロヤを抱きしめ、豊満な胸で窒息させるようにしながらのけぞつた。

少年の腰がガクガクと震え、結合部からどぷりと精液があふれ出した。

心臓の鼓動にあわせて、ヒロヤのペニスが精液を尚もクララの膣奥へと送り出す。

「ややあつて。」

ガククリと、少年の身体から力が抜ける。

「溶ける……………チン〇が溶けちやう……………」

「私はまだイッてないわよ、ヒロヤ」
言いながらブラックボーンがヒロヤの細い身体を抱きしめながら後ろに下がり、クララから少年のペニスを「にゅぶり」と引き抜いた。

「さあ、イカせて」

そう言うときブラックボーンはヒロヤのアナルを犯しまくつた。

少年が獣の声をあげてシートを握りしめ、吠える。やがて、ブラックボーンも野獣の咆哮をあげながらヒロヤの中に注ぎ込んだ。

「ああ、ヒロヤのアナル……………最高……………」

ぬぶりと人造のものとは思えないほどリアルな粘りけと匂いの精液と、少年の腸液を混ぜたものの匂い。

普段なら顔をしかめるその匂いが強烈な媚薬の香りになってメイの鼻をくすぐる。

「さあ、ヒロヤ……復讐して……」

ばん、と軽くブラックボーンはヒロヤの引き締まった少女のような尻を叩いた。

クララの愛液と、自らの精液にまみれた少年のペニスはまだ元気だ。

「次は……メイ」

拘束を解かれたヒロヤはふらふらとメイ近寄った。男だと思う前にメイは目の前のペニスにむしやぶりついていた。

「あ……凄……メイ……上手……う」

ヒロヤがメイの装着したハニー・ザ・ハガールのマスクの頭、兎の耳のようになった部分を掴んでうつとりと腰を震わせた。

少年のペニスには精液だけではなく、クララの匂いと味がした。

それだけでもうヒロヤはメイにとってクララの一部であり、クララの一部は愛すべきもの、だった。

「バックから……して」

自らうつぶせになり、小さく引き締まった尻を高く掲げてメイは、ヒロヤに頼み、理性の光を一切失った少年は、小ぶりの尻を驚つかみにすると一気に突き入れた。

「おふうっ！」

脳天を貫く挿入の快楽に、メイははしたなく声を上げてヒロヤを受け容れた。

臍肉をかき分けて進んでくる本物の「男」。

本来なら嫌悪の対象の筈が、何もかもが愛おしく、そして新鮮だった。

ソウルラテックスでは味わえない粘膜同士の睦み合う感触。血の脈動。精液が注ぎ込まれるという予感。

恋人の見ている前でバックから、獣の体位で貫かれるという背徳感。

ヒロヤが動き始める。

甘い声がメイの口から迸る。

少年が、ペニスが、本物の男のものが自分の中にあることがこれほどの快楽だとは思わなかった。

「いい、男いい……本物の、本物のペニス、いいっ！」

シートを掴み、のたうつメイの細い腰に、同じくらい華奢な少年の腰が激しく撃ち込まれる。

「私も……混ぜて」

さらにヒロヤの腰をクララが掴んだ。

股間にはバイオデイルドが生えている。

「あか……あ……く、クララの、クララのが来たあつ！」

一気に、さっきまでブラックボーンのペニスを受け容れていたアナルを貫いて、少年は牝の声をあげた。

「男の子、犯すの……好き、好きい！」

クララが激しく腰を使う。メイの身体はふたり分の質量と勢いで激しく貫かれた。

「はひいっ、ひいっ、いいいっ！」

肉欲の解放がこれほどの快楽になることを、メイは初めて知った。

自分が同性愛であるとか、異性を受け容れられないとか、クララへの思いとか、そういうものが全て白く塗りつぶされていく。

精液の色に。

やがて、ヒロヤがのけぞりクララが吠えて……男の精液を初めて子宮に受け容れたとき、メイは半狂乱の叫びをあげ、意識を飛ばした。

そしていつの間にか対面座位で前をクララに犯されながら、アナルをヒロヤに貫かれたときも、快楽の声をあげてそれを受け容れていた。

誰ともなく、クララの唇にキスし、やがて舌が絡み合い、互いの唇を求めた。

クララのアナルを、ブラックボーンが奪うのを見たとき、ヒロヤにメイは激しくディーブキスをしな

がら、犯している彼のペニスをしごき上げ、精液を

しぶかせた。

自分以外の誰かに犯されている恋人を見るのが興奮した。

それがおかしいと思う余裕はもうメイにも、クララにもなかった。

☆

それからどれくらい交わりが続いたのか。

さすがのクララの体力が尽き、アルテミスの体力も尽き、それから懇々と四人は眠りを食った。

「う……あ……あ……」

メイは身体に乾いた体液で糊付けしたように貼り付いたシートを、パリパリと引き剥がしながら起き上がった。

太腿の内側を、何十人分もの疑似も本物も合わせた精液がどろりと流れ落ちていく。

「あ……まだ……出てる」

思わずメイは下腹部に手を当てた。

少し膨らんでいるように感じるのは、あれだけ注ぎ込まれ、注ぎ込んだ精液の量を身体が覚えているからか。

バイオデイルドー三本は、酷使の末にねじ切れ、干からびて部屋の隅に転がっている。

バイオデイルドーが壊れた後も、四人は快楽を貪り合った。

その様子を思い出して、メイは真っ赤になる。恥知らずという古風な言葉が似合うそのままの状況を繰り返していたのだ。

最後はヒロヤを取り合って、あぶれた者がヒロヤを受け容れた者を責め立てるという状況まで起こったし、またあぶれた同士でレズ行為にもふけた。

人は肉体のどの部位においても快楽を得られるのだということ、ブラックボーンことアルテミスとヒロヤは二人の身体に刻み込んでいた。

「今……何日？」

スマホを取りだして見てみると、五日間が過ぎて

いる。

「！」

驚いて身をすくめ、慌てて家に電話をかけようとしたが、圏外だ。
クララとメイは、夜、同衾してもちゃんと学校には通っている。

「大丈夫だよ」

起き上がったヒロヤが疲れ切った顔で微笑んだ。

「ここと外の世界は時間の流れが違う……セックステンパーとはいえ、NUDEの設備の真下に普通の方法で部屋なんか作れるもんか。クン・ヤンの『壺中の二天』の技術を応用したものだ。本来は怪我の回復とかに遣うための施設だけだね……外の世界じゃ二時間も経ってない」

ヒロヤの説明の意味はさっぱりだが、最後の所はメイにも理解出来た。

「あの……だ、大丈夫？」

三人……しかもうちふたりは超人に分類される相手に激しく犯され、メイとは比較にならない大量の疑似精液を注ぎ込まれたというのに、もう身体は快復しているらしかった。

メイの目の前で、爪痕だらけの身体にしなやかな皮膚が戻っていく。

さらに不思議なことに、あれだけ快楽を貪り合っていて、愛おしいとさえ思ってた度にも口づけを交わした仲だというのに、今、目が覚めてみると「男」だということに嫌悪と恐怖がうっすらわき上がってくるのをメイは感じた。

「大丈夫だよ……それに、例の装置は切ったから、もう君たちは正気の筈だ。僕の裸を見て嫌悪感を抱いてもそれは当然。僕は少し傷つくけどね」
壁に掛かったバスローブを少年は取って全裸の身に纏った。

その時ちらり少年の牝のような形の綺麗な尻が見える。

一時は三人のバイオデイルドーを受け容れ、開き

きつていたアナルも元に戻っているようだ……ヒロヤことブルースカルが特と殊な薬物を使用しており、肉体が不死身に近い状態という話は本当かも知れない。とメイは頭の片隅で思った。

「今までののは幻とか、機械が見せた幻影みたいなものさ」

「え……？」

裸で抱き合ったまま眠り続けるブラックポーン……今はその仮面も外れてアルテミスとしての素顔を完全に晒しているが……とクララを見ながらヒロヤは笑った。

「種明かしをするよね、この三日間、この中で僕と君たちはアルテミスの欲望を解消するための道具にされたんだ……悪いとは思ったけど、これで貸し借りナシってことで」

「？」

「アルテミスが言った発情装置はね、彼女の潜在的な快楽への興味と願望を電気信号に変換して脳に直接送り込む装置だった。僕はそれを改良して、装置が起動している間は効果範囲にいる誰もが彼女の望む性癖、性への快楽の虜になるように再プログラムした……だから、この三日間、僕のペニスを受け容れたからって君たちが男に目覚めたわけでもないし、彼女が言っていたみたいに肉体が男を受け容れるようになってるわけでもない、一時的に脳がバグったと思ってくれ」

ヒロヤはソファに腰を下ろし、さらに三人の残したキスマークが薄れていくのを、手鏡を使って観察しながら軽く言う。

「これも、彼女の『治療』なんだ。今のままじゃ、彼女の中の闇は大きすぎて、ハイパートピアに帰れない。僕がクララにレイプされたぐらいで揺らぐようじゃ、これからかなり時間が掛かりそうだけだね」

ヒロヤは寂しげに言った。

「帰すつもりなの？ここに定住させるんじゃないかって？」

「無理だよ」

ヒロヤは不思議に透明な表情でメイを見た。

「僕は男で、悪いことも山ほどしてきた、清らかな心の主でもない。とてもハイパートピアには行けないさ」

「でも……」

メイは首を捻る。

ヒロヤとアルテミスを見てると分ちがたく、またアルテミスもハイパートピア帰還の未練は断ち切っているように思えた。

「彼女は口では色々言うけど、心の底ではハイパートピアに帰りがたがってるんだよ。ブラックポーンもアルテミスも月影テルミも僕にとっては大事だけど、彼女の本当の心の平安は故郷にある」

ヒロヤはクラブソーダを冷蔵庫から二本とりだし、メイに放った。

「だけど、今の心の上まではハイパートピアの『門』をくぐれない。僕は彼女を治療して、『門』をくぐる事が出来る様にする」

クラブソーダの封を切ると、ヒロヤは喉を鳴らし、一気に五〇〇ミリリットルのペットボトルを飲み干した。

「なんで……どうして？」

自分もクラブソーダの封を切りながらメイは問う。「本当に、彼女が好きなんだ……絶対に言うなよ？」

ちらりと眠ったままのブラックポーン……アルテミスを見やりながらヒロヤは悪戯っぽい顔で続けた。

「彼女は責任感があつて、正義感があつて、最初のエイズワンダー、遙アテナが女王候補から降りた後は自分がその座を埋めなくちゃと頑張った。そしてどうしても八番目の感覚が目覚めない自分への苛立ちがあつて、自分自身の快楽に対する弱さを嫌悪していた。今は快楽を受け容れたけど、それに対する罪悪感や、これまでの我慢の鬱積が転換した心の闇

をあいつらに強化された後遺症が残ってる」

「そんなことじゃないわ」

メイは理屈を並べるヒロヤを制した。

「平気なの？ 自分の元を離れていくのよ？ 愛してないの？」

「あの子」

ヒロヤは暫く黙り、恥ずかしそうに言葉が続けた。

「天女の羽衣、つて昔話、知ってる？」

「ええ」

水浴びをしていた天女とそのの羽衣を見つけた漁師が羽衣を隠し、天女を女房にするが、やがて羽衣を見つけた天女は天に帰ってしまう、という物語だ。

「僕はあの漁師になりたくない」

ヒロヤは言いきった。

「僕は僕のやりたいことに彼女を巻きこんだ、ヒーロー稼業もそうだけど、彼女が欲しかったんだ。その代わり財産も童貞も心も身体も彼女に捧げた、処女は……まあ君の恋人に奪われたけど、でもそれ以外、この血の一滴まで彼女に捧げる。彼女を食る代わりに。でも、それだけじゃ嫌なんだ………そう、エゴだね」

あははと少年は笑った。

「エゴで、僕は彼女の心の幸せを願う、彼女の幸せになる事なら何でもする。最終的に彼女がハイパートピアに帰れるように。帰ったあと、戻ってきて僕を選んでくれるなら嬉しいけど、選んでくれなくても、それでいい………君だってそういうつもりで、クララのためにソウルラテックスに身を包んだんだろ？」

真つ直ぐな目で、ヒロヤに言われ、メイは何も返せなかった。

「はじめの二分、終わりの一秒、それが幸せなら、納得出来るなら、それでいい」

ヒロヤの眼は、メイには不思議なぐらい澄んで見えた。

ばん、とヒロヤは手を叩く。

「さあ、風呂に入って部屋の片付けをしよう………君の恋人も、僕の恋人も、家事や掃除はからつきしだろ？ 僕らがやらないとね」

「ええ」

頷いて、メイは生涯、最初で最後のことをした。

ヒロヤに………男に近づいてそつと口づけしたのだ。

「あなたが女の子だったなら、私、きつと今頃クララとどつちを取るか悩んだと思う」

「光栄だね」

少年は悪魔のように優しく微笑んだ。

皮肉でもお世辞でもなく、本気の笑みだとメイは感じ、同時にこの笑顔にアルテミスは心を許したのかも知れないと納得もした。

もつとも、この悪魔はそれほど優しくはない。

「ただ、クララはオムニセクシャル（両性愛者）の可能性があるから注意しろよ」

「え？」

唐突な言葉に驚くメイを残し、少年は笑いながらシャワールームに消えた。

彼が言ったことが冗談なのか、それとも本当の事なのか、残されメイは暫く悩んだ。

クララは、アルテミスと抱き合っただままだ眠りに落ちている。

目覚めた彼女がブラックボーンの正体が月影テルミ先生であり、ハイパートピアの戦士として名高いアルテミスでもある、と知って驚き、ヒロヤから、「お前の恋人は冗談抜きでここまで人の顔の認識能力がないのか？ 実はこれまで戦ってきたヴィランどもの呪いでもかかっているんじゃないか？」と、かなり本気で心配させるのはその数時間後。

さらに「他の自分の被害者にも謝りに行く」と言い出したクララと、今回の様な性行為が起こる可能性を心配したメイとひと悶着の末、彼女が心配して

いたとおりの「犠牲者」たちとの爛れた日々が始まり、いつしかそれに慣れてしまうのはこれより数日後の話である。

(了)

あとがき

●環望

どうも。「ウチのムスメに手を出すな！」公式同人誌8冊目です。
今回の漫画は「ウチムス」本編からちょうど一年後という設定で描かせていただきました。
以前の同人誌「MILF of STEEL RETURNS」で50歳のアテナの容姿を割と普通に描いて
しまって「もう少し崩れた感じにしたかったな〜」とずっと思っていました。だったら
「そういう時期もあった」というのを描こうと（笑）。さらに悪乗りしてもっちー先生作の
伝説の「ディープスロート」コスも復活させて、。ノリノリで描きすぎて前後編になっちゃ
いました。後半は冬コミ「UNCANNY EIGHTHWONDER No.2」にて。お楽しみに！

●Gemma

「ヒーローを目指していたけど芽が出なくてNUDEに就職した」というリサ達の設定は掘り下
げると相当面白いのではないかと前から思っています。NUDEに入る前にはそれなりに焦っ
ていた時期もあったはずで、今回はそんな時期を想定して書いてみました。あと本家の環先生
やティクラランさん達が得意とする「実在の事件をヒーローネタと絡めていじる」というの
をやってみたかったんですが、これくらいが限界でした。

●ティクララン

最初はほのぼのとしたスケッチ風の小品を、とっていたら最終的に得体の知れない話になって
しまいました。一晩徹夜で一気にした無理がたたったのでしょうか。表舞台で華々しく戦う
ヒーローたちの陰には、営繕部の仕事も『汚れ仕事』も等しく存在しているはずで、彼女に
とっては、水道修理の技能も殺人の技能も全く等価なのかもしれません。
それはそれとして、『ソウルリキッドチェーンバース』のネタもちらほら頭に浮かんでいるん
ですが、どうしたもんでしょうか。

●神野オキナ

毎回「ここまで書いていいのかしら?」「こんなことやらせていいんだろうか?」と思いつつ
「えーいやってしまえ!」で書いておりますが、環先生から一度も内容についての「ノー」を
いただいたことがありません。

その懐の深さ故にやりたい放題やらせていただけて、今回も感謝です。

とはいえ、ブラックボーンは元々ブッチャーU先生から環先生に送られたキャラクターであり、
ブルースカルも私から環先生に差し上げたキャラクター。彼らの未来がどうなるかは環先生の
頭の中にあり、そちらが「正伝」であります。

それを少しでも引き出せたら、あるいは別の枝葉を導き出せたら、

と思いつつ今回も、結局楽しんで書かせて頂きました、

ありがとうございます！

UNCANNY EIGHTHWONDER No.1

環望

編集人 環望 (Twitterアカウント@tamakinozomu)

連絡先 tamakiya66@yahoo.co.jp

執筆者 環望 Gemma ティクララン 神野オキナ

発行日 2017年8月13日

印刷所 POPLS



Uncanny **アンキヤニー・エイズワンダー** WUNDER

FIGHTER

No.1

Don't
meddle in
my
daughter!



TAMAKIYA